

イエユウレイグモの産卵期

西野 真由子

1. はじめに

イエユウレイグモ *Pholcus phalangioides* は屋内性のクモである。産卵期について、宮下(1991)は冬期に産卵がごく少なくなるがほとんど一年中であるとし、新海(2006)は6~8月としている。屋内に生息するオオヒメグモ *Parasteatoda tepidariorum* では産卵期の明瞭な季節性がある(田中 1993)。イエユウレイグモの産卵期にも季節性はあるのだろうか、大阪における産卵・孵化を調査した。

2. 方 法

1995年6月から2010年11月まで、大阪府堺市においてイエユウレイグモ24頭の産卵・孵化を調査した。2007年に産卵した4頭にはマーキング(マニキュアを使用)して越冬するかどうかを調べた。観察地は物置小屋と屋外トイレの間の幅2m、長さ3.5m、高さ2mの屋根付き通路で、風雨は直接かからなかった。また日没後も午後11時ごろまで点灯してあった。

3. 結 果

1995年6月から2010年11月まで24頭28例の産卵を観察した。このうち4頭は35~62日の間隔で複数回産卵した。一卵の当たりの卵数は25~70個だった。

産卵日が最も早かったのは5月15日(2002年)、最も遅かったのは12月29日(2002年)だった。月別の産出卵のう数が最も多かったのは6月、次いで7月で、8月以降は徐々に減少した(表1)。10月に産卵した1例は同年6月に孵化したクモだった。また2007年6月に産卵した母グモを翌年3月に確認した。

卵が孵化したのは17例だった。15例は卵のう内の卵がすべて孵化したが、2例は一部の卵のみ孵化した。産卵日が明確であった13例では、産卵後11日から24日で孵化した。気温の高い時期は孵化までの日数が短い傾向があった(表2)。

孵化しなかったのは5例で、母グモが死亡した1例を除いた4例では、産卵後1か月前後で母グモが卵のうを捨てた。また6例では卵のうを保持した母グモが行方不明となったので、孵化は不明だった。10月以降の産卵5例は不明1例を含め、いずれも孵化を確認できなかった。

図1に月別の卵のう数と月平均気温の平年値(大阪府堺市)を示した。気温が最も高い8月には産出卵のう数も孵化卵のう数も6~7月より減少した。

表 1. 月別産出卵のう数と孵化状況

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
孵化	3	5	4	2	3	0	0	0
孵化せず	0	1 ¹⁾	0	0	0	2 ²⁾	1 ³⁾	1 ⁴⁾
不明	0	2	2	1	0	0	1	0
合計	3	8	6	3	3	2	2	1

1) 産卵 18 日後に母グモが卵のうを捨てた

2) 1 例は同年 6 月に孵化したクモが産卵，母グモは襲われ死亡したが卵のうは残存

1 例は産卵 36 日後に母グモが卵のうを捨てた

3) 産卵後 1 か月ごろに母グモが卵のうを捨てた

4) 産卵 33 日後に母グモが卵のうを捨てた

表 2. 産卵日と孵化までの日数

産卵日	産卵から孵化までの日数 (産卵日順)
5月	24日, 23日
6月	19日, 21日, 16日, 16日
7月	16日, 19日, 14日, 14日
8月	11日
9月	18日, 18日

注) 同じ月では左方のデータの産卵日が早い

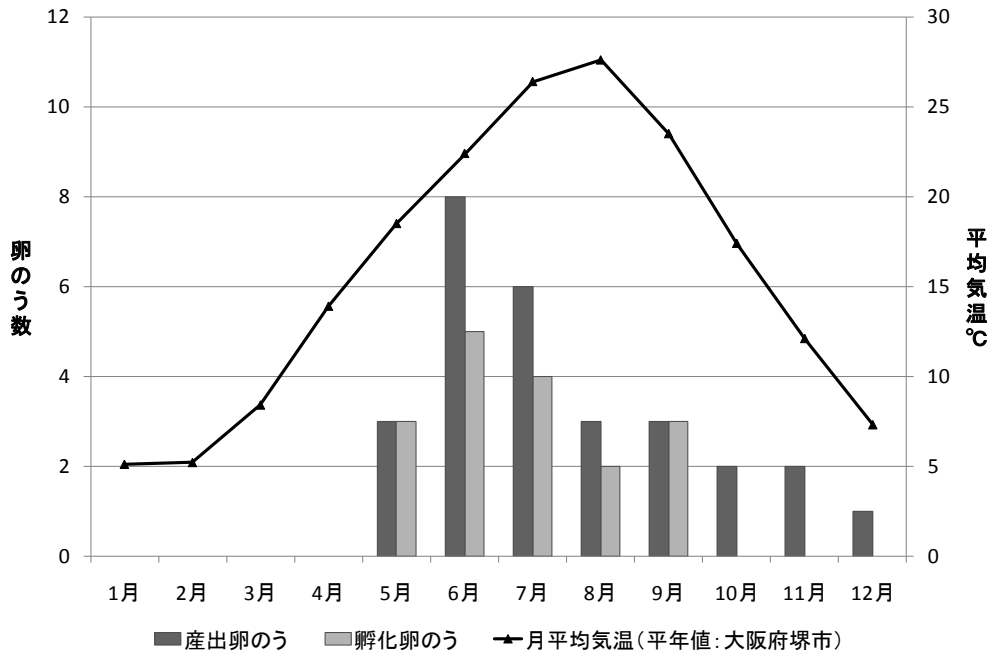


図 1. イエユウレイグモの産卵・孵化と月平均気温

産卵方法（観察日時 1996年7月3日20時46分～20時51分）

1. クモは不規則網にぶら下がり、体を上下に振動させ、赤茶色の卵を産出する。両第3脚で卵を支えながら、体を上下に振動し続ける（4分間）。直径4mmの卵塊ができる。
2. 産卵終了すると第3脚の間に糸を引き、長さ2mmの糸で卵塊を吊り下げる。
3. 左右の第4脚で交互に糸いぼから糸を引き出し、卵のう表面にかける（1分間）。
4. 卵のうを口にくわえる。

母グモは孵化するまで卵のうを口にくわえているが、餌がかかると不規則網に卵のうを吊るして捕食した。同様に卵のうを吊るして交接した例も観察した。

なお2010年には左第3, 4脚の欠損したクモ、左右の第4脚の欠損したクモの産卵を確認したが、いずれの卵のうも母グモとともに行方不明になったので、孵化は不明だった。

孵化方法

1. 卵から幼体の頭胸部が出る。
2. 第1脚から第4脚まで順に脚が出る。
3. 8本の脚でふんばり、最後に腹部が出る。

孵化した幼体は卵のうの下部に集まる。母グモは時々第2, 3脚で卵のうの周りをこするように揺らして孵化を促す。母グモが卵膜を噛んで孵化を促すこともある。数時間で孵化が終了すると、母グモは卵のうを口から離し、不規則網につす。幼体は母グモの張った不規則網の糸を伝って卵のうから離れる。幼体が卵のうから離れた後、母グモは卵のうを捨てる。孵化後3～5日で脱皮し、2令幼体となり、少しずつ分散していく。

4. 考 察

1) イエユウレイグモの産卵期の季節性

イエユウレイグモは5～12月に産卵したが、6～7月に多い傾向があった（表1）。今回の結果からは、産卵期に季節性はあると考えられる。10月以降にも5例の産卵を観察したが、孵化を確認できなかった。

孵化しなかった5例のうち4例が10月以降の産卵であることから、原因としてまず低温などの外的要因が考えられる。イエユウレイグモと同様な環境に生息するオオヒメグモでは15度以下では卵はほとんど孵化できない（田中1993）。イエユウレイグモの卵の耐寒性については不明だが、低温の影響はあるだろう。

また未受精など内的要因も考えられる。23.5℃中間日長（14L-10D）の飼育実験下では成体メスは6月から平均538.4日生存したが、150日ぐらいたつと交接させても未受精卵しか産出しなくなった（Miyashita 1988b）。今回の観察でも成体は1年中見られ、11月や2月にも交接した（図2）ほか、産卵後のメスの越冬も確認した。今回の未孵化5例のうち、1例は成体になってすぐに産卵したことが分かっているが、残り4例の母グモが成体になった時期は不明である。5～7月ごろに成体となったクモが10月以降や翌年6月の未孵化卵のうを産出したと考えると、Miyashita（1988b）の実験結果と矛盾しない。

2) 2 化性の可能性

10 月産卵の 1 例は同年 6 月 8 日に孵化したクモで、孵化後 118 日で産卵した。

Miyashita (1988a) の飼育実験において、25°C で 3~4 日毎に給餌すると、長日 (16L-8D)・短日 (10L-14D) 条件とも 110-130 日で成体になったこととも一致する。

しかし、産卵の多かった 6~7 月の卵のうちでも孵化するには 2 週間以上かかる (表 2)。また大阪の 7~8 月は平均気温が 25°C を越えるが、9 月 23.5°C、10 月 17.4°C と下がる (図 1)。Miyashita (1990) のユウレイグモ *Pholcus crypticolens* の飼育実験では、7 月 12 日に孵化した幼体は自然条件下でも 25°C 長日条件 (16L-8D) でも 45-85 日後に成体になった。したがって、7~8 月は高温であるものの、イエユウレイグモの自然条件下の発育が 25°C 飼育実験下より短縮することは期待できない。今回の観察例は 6 月上旬と早期に孵化したため、自然条件下では短期間で成体となったと考えられる。10 月以降の気温や餌条件を考えると、大半のクモにとって年 2 化は難しいだろう。

3) オオヒメグモとの比較

イエユウレイグモの産卵は暖房の効いた飼育室では冬期でも頻繁にみられるが、オオヒメグモの産卵は自然条件下の冬期にはほとんどみられなくなる (宮下 1991)。今回の観察でも、イエユウレイグモの産卵は 6~7 月に多かったが、その後も 12 月まで産卵した (表 1)。オオヒメグモは幼生休眠と生殖休眠で繁殖期を制御している (田中 1993) のに対し、イエユウレイグモではそれほど厳密な生活環制御はないようにみえる。

25°C 長日条件、同じ餌条件で成体になるまでの日数を比較すると、オオヒメグモ 60-80 日に対し、イエユウレイグモは 110-130 日だった (宮下 1991)。発育日数が長ければ、幼生休眠しなくても新成体の出現が遅延し、秋以降の産卵が抑制される。また今回のように産卵しても孵化できなければ、生殖休眠しなくても秋以降に新たな幼体は発生しない。したがって、休眠せずに気温のみで生活環制御しているという仮説も考えられる。

しかし、イエユウレイグモの産卵に関する飼育実験は 23.5°C 中間日長下のみであった (Miyashita 1988b)。また幼体の飼育実験は同一餌条件における 25°C 長日・短日下と 23.5°C 中間日長・暗黒 (24D) 下であった (Miyashita 1988a)。同一温度・餌条件では幼体の発育は日長条件に影響されなかったが、休眠を否定するためには、宮下 (1991) も指摘しているように、日長条件と温度、餌条件を組み合わせた飼育実験が必要である。産卵のピークは 6 月で、気温が最も高い 8 月には減少した (図 1) ことも気温以外の要因の可能性を示唆する。

今回、イエユウレイグモの産卵期には季節性がみられたが、気温以外の要因については不明であり、生活史の解明のため今後の調査、検証実験が必要である。



図 2. イエユウレイグモの交接 (2008年2月16日 18:56)

5. 謝 辞

文献を提供, 原稿の内容について貴重なご教示をいただきました池田博明先生に深く感謝します.

6. 引用文献

- Miyashita K. 1988a. Development of *Pholcus phalangioides* (Fuesslin) (Araneae, Pholcidae) under long and short photoperiods. *Journal of arachnology*. 16: 126-129.
- Miyashita K. 1988b. Egg production in *Pholcus phalangioides* (Fuesslin) (Araneae, Pholcidae) under a constant temperature and photoperiod. *Journal of arachnology*. 16: 129-131.
- Miyashita K. 1990. Effect of photoperiod on the development of *Pholcus cryticolens* Bös. et Sta. (Araneae: Pholcidae). *Acta arachnologica*, 39: 55-58.
- 宮下和喜 1991. クモ特に家住性クモの発育・産卵と日長条件. 文部省科学研究費補助金一般研究 (C) 01540552 研究成果報告書.
- 新海栄一 2006. 日本のクモ. 文一総合出版.
- 田中一裕 1993. クモ類の休眠と季節適応. pp.100-109. In: 竹田真木生・田中誠二編 昆虫の季節適応と休眠. 文一総合出版.

座間市のクモ調査ノート (2)

神奈川県立座間谷戸山公園のカネコトタテグモ

藤野 知弘・池田 博明

座間市のクモ調査は「座間市のクモ」(1993)として目録がまとめられたが、1992年10月に、調査員のひとり、藤野は座間市谷戸山公園内でカネコトタテグモのコロニーを発見し、詳細な記録を取った。しかし、この生息地は11月下旬の区画工事により消失した。藤野は個体群を座間市内の成光学園内及び南栗原の道路脇に移住させたが、定着は一時的だった。

さらに藤野は1995年5月17日に座間市谷戸山公園内で別のコロニーを発見し、記録を取った。この場所はその後、伐採や土砂の崩落が進み、2010年12月の再調査ではカネコトタテグモのコロニーは絶滅したことが確認された。

ただし、2010年の調査で公園周辺の別地点でカネコトタテグモのコロニーが発見されたことで、座間市谷戸山公園のカネコトタテグモの生息は確認された。1992年および1995年に藤野が取った個体群の記録を池田が編集して報告する。

(1) 西側崖地個体群

1992年10月21日に、谷戸山公園内、西側崖地にてカネコトタテグモ(以下クモ)の密集地を発見し、巣穴の分布を調査した。この区間は11月20日以降の工事ですべて削り取られてしまう予定であったので、10月24日から11月16日の間に不定期に掘り取ってクモを藤野の勤務先の成功学園敷地内及び南栗原の道路脇に移住した。どちらも移住前に既にカネコトタテグモが数頭生息していた。

崖地は幅が40~50mあるが、クモの巣穴は中央部に集中しており、⑤より右側には空穴が多く、特に乾燥面には古巣と空穴が目立った。①~⑤の区間で巣のフタのしっかりしたものの個体数を数えると、①(区画は90cm幅・70cm高。底辺は地上から80cmの高さ)23頭、②(区画120cm幅・70cm高)14頭、③(区画90cm幅・60cm高)33頭、④(区画90cm幅・70cm高)21頭、⑤(区画100cm幅・70cm高)37頭だった(図1)。若干の数え落としはあるかもしれない。移住させようと掘り取ったが、このうち3分の1から4分の1は空き巣だった。

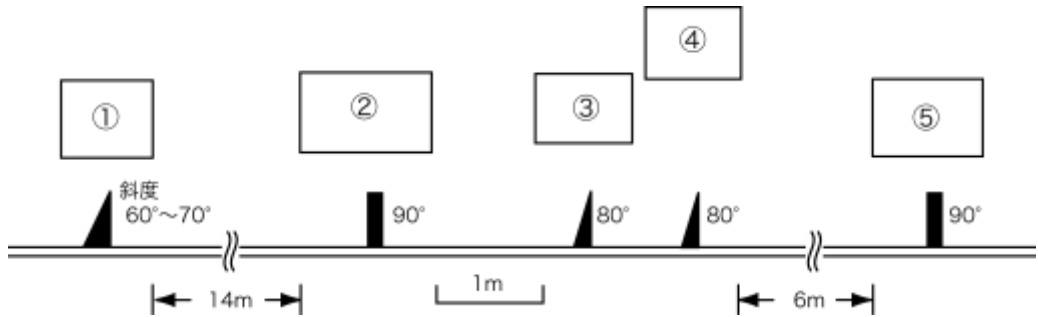


図 1. 西側崖地個体群のカネコッタテグモ個体群の生息地. 二重線は地表面を表す.

巣穴は地上から 80~160 cm の間に多く、その上は乾燥気味だし、その下は崩土がたまり斜度が 45~60 度となり、巣穴は見られない。比較的上方に巣穴縦径が 10 mm 以上のものが多く、下方には 5 mm 程の小さなものが多い。大きな巣の周辺に小さな巣穴が散在し、大きな巣穴どうしは 10~15 cm は離れている。子グモと同居するメスのすぐ隣にオスの巣穴が一例あった。

巣穴は意外に浅く、深さ 3 cm 程度は体長 5 mm 程度の幼体、小さな子グモの巣は横にはうものも多かった。深さ 10cm 程度のもので多く、10~15 cm のものはクモも体長 10~15 mm と大きかった。巣穴はほぼ直線的で水平に近いが、奥がいくらか下がる。一部にかなり下がったものもあった。ふた径が 10 mm 前後の穴は白っぽく糸が打たれている。穴内にはゴミはなかった。最深部に黒または赤紫色の粒状のものがある。フタの傷んでいるもの、少し開いているものにはクモがいなかった。ムカデがいたのが 2 穴あった。

上記の①~⑤の隣接地点で 9 頭を掘り取ったところ、うち 3 頭は子グモと同居していた。子グモを持ったクモの体長は 15 mm 以上と大きい。子グモは体長 2 mm 程で白い。掘ると子グモはかなり活発に動き出す。メス 1 頭あたり 50 頭前後の幼体が同居していた。掘り取った子グモを穴の前に置くとそのまま動かないもの、動き始めるものがあった。動きは同じ方向に向かうが、明暗のせいかもしれない。それぞれ崖面の小さなくぼみや裂け目に入った。移住したクモのほとんどはすぐにドライバーで開けた横穴（深さ 10~13 cm）に入り込み、翌日には扉作りを完了していた。

(2) テニスコート脇道個体群

1995 年 5 月 17 日、藤野は谷戸山公園内、ひまわりテニスコートの道路脇の南崖面にクモの生息地を発見し、分布を調査した。生息地は林内に道路を通した法面で崖地になっており、崖の上にはコナラやクヌギイヌシデなどの樹木が生えている。40 m くらいの直線距離で巣穴の直径が 10 mm より大型の巣が 17 個、5~10 mm の中型の巣が 7 個、5 mm 未満の小型巣が 16 個確認した（図 2）。2010 年 12 月に笹岡文雄氏ほか東京蜘蛛談話会有志らにより詳細調査を行ったが、カネコッタテグモ個体群は消失していた。

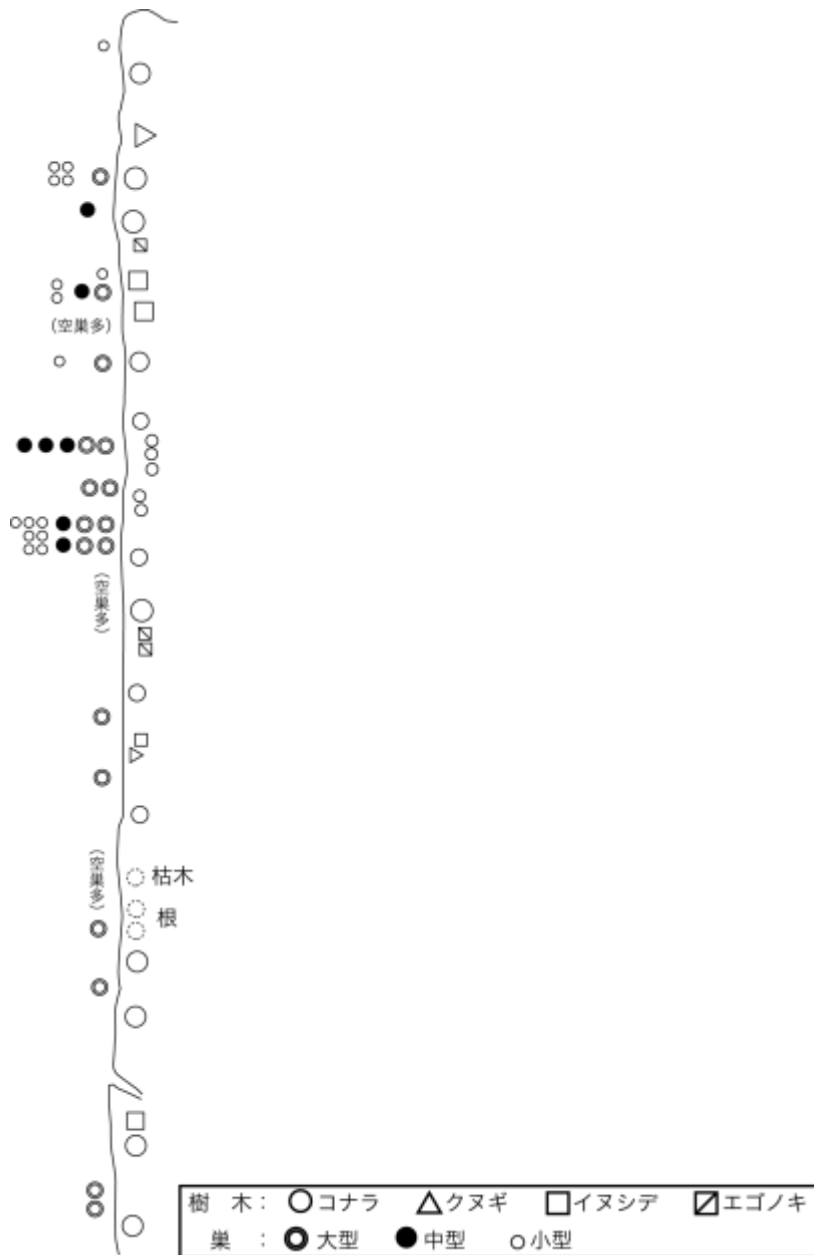


図 2. テニスコート脇道個体群 樹木とクモの分布.

クモを表す記号は樹木付近の下の崖地にあるクモの大きさを表すもので分布位置を正確に表すものではない。

参考文献

- 池田博明, 1991. 座間市のクモ調査ノート (1) Kishidaia, (62): 13-18.
 諏訪哲夫・藤野知弘・池田博明, 1993. 座間市のクモ. IN 『座間市の動物』. pp.345-397.
 座間市生涯学習推進課.

アカイロトリノフンダマシの交接

山本 一幸

アカイロトリノフンダマシの交接を観察したので報告する。兵庫県北部（但馬地方）で確認しているトリノフンダマシ属 4 種（山本 2009）において、アカイロトリノフンダマシは生息数も多く、夜間の観察では林縁の樹木の枝先などに同心円状の円網を張り、捕食行動は普通に観察できる。しかし、交接はこの度初めて観察することができた。交接が行われた場所が樹木の枝先に引かれた橋糸であることや、交接を中断して再開する点はトリノフンダマシ（山本 2010）と同じであった。

観察結果

- ・日時：2010年7月30日 20時50分～21時00分
- ・場所：兵庫県美方郡新温泉町久斗山
村はずれの山沿いの畑に植えられた果樹（モモ）の枝先。地表から約1mの高さ。

表 1. 2010年7月30日に観察されたアカイロトリノフンダマシの交接行動

時刻	行動
20時52分	約20cmの長さにひかれた橋糸の中央部に居るメスに向かって、オスが第1・2脚をふりかざしながらゆっくりと接近した（図1）。
20時54分	メスと対峙したオスはさらに近づき、両者とも第1脚を接した後、交接が行われた（図2）。
20時55分	オスはメスから離れ、反対方向を向いた。
20時56分	メスの方が少しオスに近づき、オスはメスの方を向き直って再び交接が行われた。
20時58分	両者が離れ、オスは橋糸をつたってそのまま枝先に移動。メスはそのまま留まり、しばらく動く様子はなかった。



図 1. オスがメスにゆっくりと接近した



図 2. アカイロトリノフンダマシの交接

参考文献

- 山本一幸 2009. “鳥の糞騙し”^{ふんだま}という名前のクモ. 西但馬の自然, 8: 8-10.
山本一幸 2010. クモの生態を観察する(その1) —造網性クモ類の配偶行動—. 但馬の自然研究, 2: 11-20.

蜘蛛と音楽 第一章・第二章 (全四章)

中島 はる

はじめに

「蜘蛛と音楽」と聞いて、人は何を思い浮かべるでしょうか。クモの姿と結びつけるなら、手足を活発に動かしての踊りとその音楽かもしれません。また、その網と結びつけるなら、オニグモの円網からレコードやCDの円盤を、規則正しいジョロウグモの網からは五線譜や五線紙を連想するかもしれません。

もう少し夢想的なイメージを描くとしみましょう。風に乗せようとクモが出す数本の糸が光りながらどこかへ向う様は、音楽の調べが空気に乗って流れてゆく光景に似ているといえないでしょうか。音楽というものは視覚ではとらえられないのですから、「光景」というのはおかしいかもしれませんが、音の連なりである調べには一つの方向性があると思われるので、そんな想像も許されるのではという気がするのです。

小川の上を、風と共に渡ってゆくクモの糸と音楽…。と夢想するのはいいとして、では実際にクモは音楽の中にどのような現れ方をしているのでしょうか。それをこれから見ていきたいと思います。

ただ音楽とクモの両方が好きという理由だけで、研究者でもない私が筆を進めてゆくことは、時にまちがいと独断の道へはまるおそれ大ですが、おそろおそろ始めることと致します。

第一章 土蜘蛛

日本の音楽に登場するクモといえばまず「土蜘蛛」、あとにも先にもこれひとつ、という観があります。

古代、大和王権に抵抗し穴居生活を営んでいた先住民を「土蜘蛛」と呼んだとか、または不服従の氏の蔑称からそういう暮らし方をしているとみなされたとか、その辺りは歴史学者に譲るとして、残念ながら、やはり悪役としての登場でした。

能では「五番目物」(または切能物)に属し、そこでは天狗や鬼が人間と闘争して敗れ去るといった類の物語が、太鼓と共に速いテンポで演じられます。この能「土蜘蛛」を元にしたものが、歌舞伎で用いられる長唄や常盤津などに続々と現れて、「土蜘蛛もの」と呼ばれるようになるのですが、そのあたりを少し詳しく見てみましょう。

□能「土蜘蛛」

五番目物。太鼓有り。五流現行。金春流と室生流は「土蜘蛛」と記す。作者不詳(大雑

把に室町時代としておく)。典拠は「平家物語」の「剣の巻」。

物語は、病に悩む源頼光の元へ侍女の胡蝶が薬を持って帰ってくるころから始まる。一向に病苦の去らぬ頼光の枕辺に、ある夜怪しい僧が立ち「我が背子が来べき宵なり、ささがにの…」という古歌を謎のように吟じて、「千筋(ちすじ)の糸」を投げかける。頼光が名刀「膝丸」で斬りつけると、怪僧は七尺ほどの蜘蛛の形を現して消えた。駆けつけた家来の武者に頼光はことの有様を語り、これより「膝丸」を「蜘蛛切」と呼ぶことを宣言する。武者と従者たちが、残された血痕をたどって蜘蛛退治に向う。行きついた大和の葛城山で古塚をとり囲んだ武者たちの前に、焰を吐き水を噴き出しながら鬼神が姿を現し、自分はこの山に年を経た土蜘蛛の精魂であると名のる。武者たちは、「王地に棲みながら朝廷に害を加えようとしたことへの天罰を受けよ」と斬りかかり、土蜘蛛は例の糸を繰り出し投げかけ抵抗するが、討ち取られて終る。

能では、謡を伴わず器楽だけで演奏する部分があり、それを囃子事(はやしごと)と呼びます。『土蜘蛛』での囃子事は、駆けつける武者の登場と退場には緊迫した「早鼓(はやつづみ)」, 軍勢を率いての再登場には「一声(いっせい)」, 土蜘蛛との闘争には「舞働(まいばたらき)」という曲です。「早鼓」が太鼓と小鼓だけで、「一声」は大小の鼓と笛で、「舞働」はそれに太鼓を加えた「四(し)拍子」で演奏されます。

小さなオーケストラと言われる能囃子は、簡素なように見えてその実とても精緻な音楽を展開します。鋭い響き、柔らかな響き、緊張感をはらんだ間、瞬間を貫くような掛け声。さまざまな要素がしっかり組み合わせられて、あの世とこの世が交錯する能舞台を演出するその独特の完璧さは、西洋音楽の世界とは全く別のものです。

ところで、五流とは別に五百年間神事としての能の伝統を守り続けてきた山形県の「黒川能」にも、「土蜘蛛」はあります。前シテの怪僧は五流では直面(ひためん=面をつけない)ですが、黒川では「土蜘蛛」と呼ばれる、眉間に縦じわのある土色の面を用います。また後シテの面も五流とは異なり角(つの)のある土俗的色彩の濃い珍しいものです(図1)。



図1. 土蜘蛛(黒川能)

黒川でも五流でも、また歌舞伎でも、「土蜘蛛」といえば何はさておき「千筋の糸」のスペクタクルでしょう。いく度も投げられ、放射状に美しく放物線を描いて散る無数の白い線。昔は幅の広い紙のテープを二、三本投げかけるだけだったものを、幕末から明治初期の金剛流家元が工夫して小書（こがき）＝特殊演出とし、以来他流や歌舞伎でもとり入れるようになったといえます。今では電気用のヒューズを芯に、薄い和紙を長くつないだものを堅く巻いていき、それを5、6ミリの幅に切って作るのだそうです。

□長唄・歌舞伎舞踊「土蜘蛛（つちぐも）」

河竹黙阿弥作詞，三世杵屋正治郎作曲。新古演劇十種の一。初演 1881 年。

能様式を模した松羽目物（まつばめもの）で、荒筋は能と変わらないが、侍女胡蝶の舞があり、後半の土蜘蛛退治では平井保昌と四天王が華やかな立廻りを演ずるなど、豊麗、豪快な舞台。音楽面では、前述の能の「舞働」の手法に三味線群が加わっての合奏「働の合方（はたらきのあいかた）」が、胸のすく迫力で特に印象的。また長唄ならでの千変万化の声の響きには圧倒されるばかりです。

□長唄「蜘蛛拍子舞（くものひょうしまい）」

別名（本名題）・舞踊劇「我背子恋の合槌（わがせこがこいのあいづち）」。初世桜田治助作詞，初世杵屋佐吉作曲。初演 1781 年。

白拍子の妻菊，実は葛城山に棲む女郎蜘蛛の精が，源頼光の館に忍び込み，頼光や四天王にとりつこうとする。しかし頼光の寝所には名剣膝丸があるので，舞いながら剣問答をするうち，やがて剣の威徳で女は正体を現し大立廻りとなる。というような荒筋ですが，歌詞を読むと，廓の話が複雑に絡まってとても難解です。江戸文化頽廢期の姿を示しているとも言われます。

けれども，音楽の面では変化に富み，聴きどころばかりの連続と言えます。長唄には部分（楽曲構成単位）を呼ぶ名称がありますが，それを使ってこの曲の聴きどころを挙げますと，冒頭近くに置かれ（通常は曲の中ほど），テンポが緩やかで叙情的な「クドキ」，太鼓のリズムが色彩的な「太鼓地」，小鼓だけの伴奏で歌う「鼓唄」，囃子方と三味線が華やかさと緊迫感を盛り上げる「合方（あいかた）」。そして，歌舞伎舞踊に古くからある形式の一つで登場人物が三味線の拍子によって歌いながら踊る「拍子舞」の部分。これらの曲のみごとさによって「蜘蛛拍子舞」は長唄の名曲，拍子舞の代表作と，日本音楽史の中で位置づけられているのです。

ところでこの作品の中で，また能や歌舞伎の中で，蜘蛛の化身が必ず吟ずる「古歌」について見てみましょう。日本書記允恭（いんぎょう）天皇のくだりに衣通郎姫（そとのおりのいらつめ）の歌として記される「わが背子が来べき夕（よい）なり ささがにのくものおこない今宵しるしも」が元でした。それが古今和歌集の十四巻で「衣通姫のひとりみて帝を恋ひたてまつりて」の序に続き，「我が背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまいかねて著しも」となり，謡曲本にこれが採られました。「蜘蛛」と言うために上の句全部が長い枕詞の役割となり，また「かねてより知らぬと言うに」とか「か

ねて知るわが身の上ぞ」などと続けるための掛詞の役をするなど、この「ささがに」の和歌はあちらこちらに姿を現します。いとしい夫（ひと）を想って詠んだ女性の歌を、変化（へんげ）の者が唐突のように唱え出すことに、多少の違和感が存在するのは否めませんが、その謎めいた言葉の絡まり合い全体が蜘蛛の暗示となっているのでしょう。

□常盤津「蜘蛛の糸」

本名題・舞踊劇「蜘蛛糸梓弦（くものいと あずさのゆみはり）」．金井三笑作詞，佐々木市蔵作曲．初演 1765 年．

葛城山の土蜘蛛の精が，切禿（きりかむろ）の少女（上の巻），仙台座頭（中の巻），山伏（下の巻）と化して現れるという三巻もの．後に「中の巻」が変遷し傾城が加わって．常盤津『蜘蛛糸宿直嘶（くものいと およづめばなし）』となった．

□長唄「土蜘蛛」

1862 年，十一世村屋六左衛門が，常盤津「蜘蛛の糸」を改作した上中下の大作．上の巻「切禿」は単独に演奏される回数が多く，観賞用長唄の傑作と言われている．

□浄瑠璃「頼光蜘蛛切」

□筑前琵琶橋会正曲（五弦用）「土蜘蛛」

このように能の「土蜘蛛」からさまざまな「土蜘蛛もの」が生まれました．主題は一つではありますが，「蜘蛛」という文字が日本音楽と日本音楽史の中にたびたび登場する，そのことだけで何がなし嬉しさを覚える筆者であります．

第二章 蜘蛛の饗宴

日本音楽史での「土蜘蛛」にあたるのが，西洋音楽史での「蜘蛛の饗宴 *Le Fesitin de l'Araignée*」（P.18 参照）ということになるでしょう．といっても「蜘蛛の饗宴」にあやかるうという作品は一つたりと生まれませんでした．

フランスの作曲家アルベール・ルーセルが 1912 年に書いたこのバレエ音楽は，バレエとしての上演は絶えてしまったものの，オーケストラ・コンサートのプログラムには時折見かけることもあり，CD を手に入れようと思えば数種類は可能という，知る人ぞ知る名曲であることは確かです．

バレエ「蜘蛛の饗宴」の初演は 1913 年のパリ，テアトル・デ・ザール．上演期間を大幅に延長する大好評だったといえます．台本はジルベール・ド・ヴォワザンがファーブルの「昆虫記」に想を得て書き，初演時の振付はレオ・シュターツ，舞台美術はマクシム・ド・トマと記録されています．ところで，1823 年生れのアンリ・ファーブルが「昆虫記」の発刊によってようやく世間一般に知られるようになり，1910 年にはレジオン・ドヌール勲章が授けられたということも，このバレエの成功に一役買っているのではという見方もあります．また，ルーセルが描いてみせた音楽世界が，当時フランスやヨーロッパで優勢だった印象主義の手法を十二分に駆使してのものだったことも，成

功の要因かもしれません。さらにつけ加えるなら、十九世紀末から二十世紀初頭に流行したアール・ヌーボー様式、身近な自然に目を向ける芸術の姿勢も、少しは影響していたかもしれません。

それではルーセルとはどんな作曲家だったのか、そして「蜘蛛の饗宴」とはどんな作品なのかをすこし詳しく見てみましょう。

□アルペール・ルーセル

1869年北フランスのトゥールコワンに、市長の孫として生まれる。父、母、祖父をあいついで亡くすが、叔母の家でゆきとどいた養育を受け、早くから音楽の才能を示す。しかし次第に海への憧れが強くなり、海軍兵学校へ進んだ後、士官としてヨーロッパ海域やインド洋を航海する。二十五歳の時軍職を去り、パリで本格的に音楽の勉強を始める。ウジェーヌ・ジグーからは主に対位法を、ヴァンサン・ダンディからは主に管弦楽法を習得。数年で頭角を現し、作曲の傍ら教鞭も執り、エリック・サティ（実はサティの方が少し年長）やヴァレーズなどを教える。1911年、インドを題材とした交響詩「エヴォカシオン（喚起）」で世間に注目されるようになり、この作品の好評が「蜘蛛の饗宴」の注文をルーセルにもたらすことになる。その後、数々の管弦楽曲、バレエ音楽、室内楽、声楽曲を発表。名声を保ち、1937年、ロワイヤンで六十八年の生涯を閉じる。

以上がルーセルの略歴です。ルーセルはドビュッシーに代表される印象主義から、オネゲルに代表される新古典主義へ移る過渡的な世代にあって、非常に個性的な作風を展開した作曲家としてフランス音楽史では重要な位置を占めています。その作風を要約するなら、「リズム」「線」「構築性」が際立つ音楽と言えるでしょう。バレエ「バッカスとアリアーヌ」「交響曲第三番」「交響曲第四番」が代表作とされていますが、他にも室内楽や歌曲など魅力的な作品も多く、ルーセルの音楽が日本でももっと知られるようになれば、と私は願っています。

□「蜘蛛の饗宴」のあらすじ

舞台はある夏の午後の庭。巨大な網の中央にクモがいてあたりを見渡している。アリの小群団がやってくる。そしてバラの花びらを見つけ苦勞してやっと持ち上げ運び去る。クモは庭の景色を眺め夢想にふけったり、自分の網がしっかりしているかどうか確かめたり、傷んでいる糸を繕ったりしている。何匹かのタマオシコガネがちょっと顔を出すがすぐにひっこんでしまい、再びアリたちがやってくる。そして二枚目のバラの花びらを運ぼうとした時、目のさめるようなチョウが登場。喜ばしげに無邪気に庭中を飛び回るその踊りを、クモは網の方へ網の方へと誘い、とうとうチョウは網に絡まって命を落とす。クモは大喜び。チョウを網からはずし繭状にラップしてから食料貯蔵庫にしまいこむ。そして勝ち誇って踊るが、突然りんごが落ちてきたので驚いて網の上へ逃げ帰る。そのりんごに向かって二匹のシンクイムシ（果物の虫）が突進するが、二匹のカマキリが現れ剣をふりかざして行く手をさえぎる。しかし、シンクイムシたちが首尾よくりんごにもぐりこんでしまったので、カマキリたちはこの失敗を互いに咎めあい、アリたちの

輪の中で決闘を始める。争ううちにカマキリたちはクモの網に捕まってしまう、クモは再び勝利の踊りを踊る。ここでカゲロウの羽化が始まる。ゆっくりとやっとのことで蛹の皮を脱ぎ、突然生命を得たように歓喜に溢れて踊るカゲロウ。アリやタマオシコガネやクモまでがその輝きに見とれほめそやす。シンクイムシたちが太った姿になってりんごから這い出し、疲れてしまったカゲロウを誘い共に踊る。やがて短い命がつきてカゲロウは死ぬ。饗宴の支度を始めたクモを、タマオシコガネの助けで自由の身になったカマキリの一匹が後ろから襲う。クモの苦しみと死。虫たち全てがカゲロウの葬式に参列し、やがてその葬列は遠ざかり消えてゆく。誰もいなくなった庭に黄昏がとぼりをおろし、同時にこの一幕もののバレエ・パントミーム（無言劇）の幕がおろされる。

□「蜘蛛の饗宴」の音楽

登場するのがクモと昆虫だけというこの稀有なる台本を渡されたら、どんな作曲家も面喰らうのではないのでしょうか。1912年、バレエの殿堂テアトル・デ・ザールのジャック・ルシェからの依頼に、ルーセルも当初なかなか応じようとしなかったそうです。けれどルーセルほどの適任者はどこを探してもいなかったでしょう。何しろ海が好き、異国が好き、そして虫眼鏡での虫の観察が好きという人だったので。逆に自然を知り愛しているからこそそのためらいだったのでは、と私は考えます。夫人の説得もあって作曲を承諾したルーセルは、案の定自然からの靈感に打たれて三ヶ月足らずで見事な二管編成オーケストラ譜を書き上げてしまいました。

全体で約32分のこの曲は、バレエ音楽ということもありますが、どこかにクライマックスがあってそこを中心に構成される音楽とは違い、沢山の小さな曲が次々に切れ間なしに演奏されます。曲の終りの音が次の曲の始まりとなっていくの間に移り進んでいるので、聴いていると気を抜く暇もなくあっという間に30分が過ぎてしまいます。場面場面を鎖のようにつないでいく手法は、最後に冒頭と同様な曲を置くことで完全なものとなり、「エンドレス」または「永劫回帰」という連想さえもが浮かんでくるようです。

ところでルーセルは過去を振り返るのがきらいな人でした。そこにも「海の男性的性格」を見たくないので、いつまでも「クモの作曲家」と呼ばれることを好まなかったそうです。そのことが関係しているのかどうか判りませんが後年、自身の手でこの作品を抜粋して『交響的断片・蜘蛛の饗宴』という組曲にしてしまったのです。時間は半分、魅力も半分以下になってしまったこちらの方が演奏会では一般的になってしまいました。ちなみにNHK交響楽団に問い合わせたところ、やはり組曲版でしか演奏したことがないという答えでした。CDでは全曲版の方が多く状況なのでひとまず安心ですが、組曲を構成するのは、「前奏曲」「アリの登場」「チョウの踊り」「カゲロウの羽化」「カゲロウの踊り」「カゲロウの葬送」の六曲だけ。「蜘蛛」の関係する曲は一切省かれています。

評論家によっては、この物語は人間の食欲と好戦的愚かさへの皮肉な寓話、教訓であり、詩人や音楽家の自由精神を象徴するカゲロウだけが賞讃されるべきなのだ、という

見方もとられています。確かに殆どが一分に満たない三十の場面（曲）の中で、「カゲロウの羽化と踊り」には七分近くが充てられているし、「カゲロウの葬送」で終結する構成からもその考えには多少の理があるかもしれません。けれどもこのバレエの主演、この物語の主題は、カゲロウでもなければクモでもなく、他の虫たちでもなく。これら全ての生きものが集う「庭」そのものであるという意見もあって、私はこちらに大賛成です。やわらかな風に花びらが舞い落ちる静かな庭。けれどそこではクモや虫たちが生きるためにさまざまなドラマをくりひろげ、それはまた明日もくり返されるかもしれない、ある午後の庭。冒頭と終りに流れるこの「庭のテーマ」は、弦楽のたゆみに乗ってフルートが奏でる、永遠の美を感じさせるメロディーです（楽譜 1）。

独自の「リズム」と「線」を縦横無尽に駆使し、また多彩な「和声」の絵筆を使い、ルーセルは細やかな自然を的確に克明に描写しました。風に揺れるクモの網のしなやかさを、せつせと働くアリたちのきびきびした動きを（これは高音域のヴァイオリンのスタッカートで）。一拍目ごとに点々が強調され、ほんとうにテフテフと飛びまわる「蝶のワルツ」。「蜘蛛の踊り」は夏の空のコガネグモの輝きを連想させる力強さ。タマオシコガネはだんご形の弾む音。シンクイムシはのろのろむくむくが目に浮ぶよう。鋭角的な「カマキリの決闘」の音楽では、金管とティンパニーがメタリックな響きで精悍な表情と鎌のぶつかる音まで聴かせてくれる。「カゲロウの羽化」のふるえるような神秘的時間は、層の厚いしかしピアノニッシモの響きでゆっくりと過ぎてゆく。それに続く「生命の踊り」も「蝶」の時とは微妙に異なるワルツで命の短さを予感させている。

というような私の楽曲解説は少し思い入れが過ぎるかもしれません。ほんとうはルーセルの音楽はいっさいの感情移入を許そうとはしないのです。短くも壮絶な曲「蜘蛛の苦しみと死」、オーボエの旋律が夕暮のように美しい「カゲロウの葬送」でさえ浪漫主義の片鱗も感じさせません。寓意性は言わずもがな人間中心主義的な何ものも盛り込まず、ただあるのは自然の営みに裏打されたような動き（テンポ感）の確かさ。このテンポ感の確かさはルーセルのほかの作品すべてについても言える特色です。それはルーセル自身もルーペで見る虫たち同様自然の一部なのだどこかで意識していたからではないかという気がします。

いずれにせよバレエ音楽『蜘蛛の饗宴』は、音楽と昆虫（もちろんクモも）の両方を愛好する人たちにとって他に類を見ない魅惑の宝箱であるということだけは断言できます。

（以下、次号。第三章「タランテラ」／第四章「蜘蛛の音楽」に続く。）

OUVRAGE PROTÉGÉ
PHOTOCOPIÉ INTERDIT
Sans autorisation
de la Société des Compositeurs
Musiciens Français
12, rue de la Harpe, 75001 PARIS

Le Festin de l'Araignée

ALBERT ROUSSEL
Op. 17.

PRÉLUDE

Lent (♩ = 56)
SOLO

1 GRANDE FLÛTE
GRANDE FLÛTE
ou PETITE FLÛTE

1 HAUTOIS
HAUTOIS
ou COR ANGLAIS

2 CLARINETTES en LA

2 BASSONS

2 CORS
Chromatiques en FA

2 TROMPETTES en UT

2 TIMBALES SI - MI

BATTERIE

CÉLESTA

HARPE

Lent (♩ = 56)
Sordina

VIOLONS
Sordina

ALTOS
Sordina

VIOLONCELLES
Sordina

CONTREBASSES
Sordina

Tous droits d'auteurs réservés
Copyright by Durand et Co^{ie} 1913-1914
DURAND S.A. Éditions Musicales

D. et F. 8442

215, RUE DU FG ST-HONORÉ 75008 PARIS

楽譜 1. 庭のテーマ

主な参考文献

第一章

観世流謡曲百番集 檜書店
黒川能狂言百番 小学館
歌舞伎図鑑 平凡社
謡曲物語 白竜社
日本音楽大辞典 平凡社
音楽辞典 平凡社
CD 蜘蛛の拍子舞 解説・田辺秀雄
(吉村伊十郎長唄全集(23)COCF-70118)

第二章

Le Festin de L' Araignée.
----fragments symphoniques-----
(Durand, S.A., Edition Musicales)
Le vie et l' oeuvre d' Albert Roussel
(Koechlin 1947)
Albert Roussel: Le festin de l' araignée
(Edmand Blakeman 1996)
バレエ音楽版 “フアーブル昆虫記”
小沼純一 (ユリイカ特集号 1995 青土社)
「蜘蛛の饗宴 作品 17」解説
アラー・アルブレシュ／寺田兼文訳 (WPCS-4281～3)
音楽辞典 平凡社
CD 「蜘蛛の饗宴」全曲版
アンセルメ指揮 (UCCD-3014)
マルティノン指揮 (WPCS-4787)
トゥルトウリエ指揮 (Cds-9494)

天草の「謎」ーキムラグモの空白地

新海明

またぞろ、今年（2009年）も初秋に、谷川さんと九州へキムラグモとトタテグモを求める旅をしてきた。毎年この時期を選ぶのは、ひとつには私の仕事上の理由（夏休みは忙しいこと）と、もうひとつはキムラのオスの出現期であるためだ。谷川さんの予定では9月4日から11日までの一週間の調査だが、さすがに私はそこまでは付き合えない。最初の3日間だけの同行記ということでお許し願いたい。

一日目

熊本空港に降り立ったのは9月4日だった。先年のクモ学会熊本大会に、私は不参加だったのだが大会最終日には熊本空港にいた。ここで谷川・宮下・長崎さんらと待ち合わせをして、熊本から鹿児島へとキムラ探しに出かけたのだ。それ以来の熊本空港だった。昼食をそそくさと済ませ、レンタカーで宇土半島の先にある三角へと向かった。ここに天草五橋がかかり天草上島へと入れるのだった。その途上の2箇所でキムラグモ探しをやったが、いたのは天草市有明町小島子でのトタテだけだった。宇土半島のつけ根までキムラは生息しているのが確認されているそうだが、半島の先での分布はどうなっているのだろう。初日の調査は2箇所で終了。すでに午後5時を回っていたので、一路、今日の宿舎であるホテルアレグリアガーデンズ天草を目指した。

高台に建つホテルは改装したばかりだという。どの世界にも生き残りをかけた熾烈な戦いがあるようだ。ここの露天風呂は気に入った。宿舎の向かい側の小高い丘に位置し、日帰りの入浴客も受け入れていた。屋外の風呂は展望プールのように「なあんだ」という代物で少しがっかりだった。しかし、展望風呂の脇に「森の露天風呂」との表示があり、斜面を下る階段がついていた。下りていくと木製のデッキの上に五右衛門風呂のような浴槽が4つ据えられていた。そのひとつに浸かり、海を臨むと木々の間に水平線が見えた。デッキの脇の崖地にはサワガニが数匹うごめいていた。露天を横切る風が爽快だった。

二日目

ホテルを出て、今日は天草下島を時計回りに一周する予定だ。今回の調査もキムラグモとトタテグモのDNAサンプル採集が目的である。そのため大雑把な採集地点が、谷川さんによってあらかじめ設定されていた。最初のポイントは新和町大多尾だ。レンタカーを「いい雰囲気のエコドライブ」へと入れて止めた。崖地にへばりついて戸ぶたを探す・・・

やっとの思いで探したのはトタテだけだった。九州でトタテグモを探すのは至難の業だが、キムラグモは簡単だった。無論、見つけれない場所もあったが、何ヶ所か巡れば必ずキムラグモの崖に行き当たった。一方、九州でトタテグモを目指して「探せ」と言われたら、われわれは途方にくれてしまう。九州で「ここならいる！」と言い切れる場所などないのだ。せいぜい「かつて、このあたりで採集されたことがある」としか言えない。「でも、今までの調査で結構探しているじゃないか」と思う方もいるだろう。これらのトタテはすべてキムラ探しの副産物なのだ。キムラを掘り取るついでに見つけたものなのだ。ここに、九州でのトタテグモ分布の様子的一端が現れていると思う。

ところが、天草ではたのみのキムラグモさえいなかったのだ。九州へ来る2週間ほど前の仙台でのクモ学会大会で、その情報は入江さんから得ていたのだったが、訪れてみると実際、その通りであった。その後の久玉町新田や魚貫町魚貫、河浦町潟などでも、ごくたまに見つけた戸ぶたの主はすべて、九州では稀なトタテグモのものだった。

天草は遠い昔に訪れた記憶がある。ここはその昔、隠れキリシタンの地だったので、明治以降に天草各地に天主堂が建立された。われわれは時間の都合で立ち寄ることはできなかったが、静かな海辺の町にたたずむ崎津天主堂や小高い丘の上にそびえた大江天主堂を車の窓越しにのぞくことができた。天草での私の思い出は牛深に尽きる。かの地で毎春催される「ハイヤ祭り」に合わせて、かつて修学旅行の生徒ともども参加したことがあった。牛深商工会議所のハイヤ祭りの実行委員会と事前に相談して訪れたのだ。そんな経緯があり、祭りの終了後に商工会議所のメンバーとの飲み会に「学校を代表」して加わった。今なら生徒引率中の飲酒などご法度であるから、「処分もの」だろう。古きよき時代の思い出だ。牛深はまたサソリモドキの分布北限の地としてクモ仲間には知られているので、ご存知の方もおられよう。就職後の間もない時期だったので、サソリモドキはおろかクモさえも採集などせずに、校務に励んでいた(?)ころだった。九州の調査はつつい昔の思い出話へとつながってしまう。お許し願いたい。

結局、天草下島を一日がかりで回ったが、キムラグモは1頭も見つけられなかった。「入江さん、恐るべし」だ。ただ、トタテグモは少ないながらも数ヶ所で見つけることができた。一応の成果をあげたのでよしとしよう。採集に粘りに粘ったので、天草を出るのがすっかり遅くなってしまった。今宵の宿泊地は八代だ。天草五橋を本土へ渡り返し、宇土半島の南側の海岸に沿って東進した。満月が煌々と昇り、九州本土を照らしていた。うねうねと宇土を巡る道路は一貫して正面に月を見据えており、忘れがたい夕景を描いた。

三日目

われわれが九州でよく利用する宿として、亀の井ホテルがある。鹿児島島の加治木での大会で宿泊先のホテルの1つとなっていたので、思い出される方もいるだろう。九州でのチェーン店なので各地に点在する。亀の井の良いところは「安い」ほかに、必ず外食チェーンの「ジョイフル」が隣接することだ。夕朝食はここで安価に済ませるのだ。ところが、朝になってここに来てびっくり、店が閉まっていたのだ。実は開店時間が遅

かっただけなのだが、旅程上「開店」を待っているわけにはいかなかった。仕方ないので車を先に走らせて、コンビニ弁当で済ませることにした。昼飯をめぐっては今まで探しあぐねて困ったことは何度もあったが、朝食では初めてである。幸いすぐに見つけることができたので問題はなかった。

八代周辺での第一ポイントは二見大野町の下大野神社だった。調査地はいつものように、あらかじめ定めた調査地の付近で、景観を見ながら「カン」で決めている。参道の脇に良さそうながけ地がのぞいていたので、さっそく探したが皆無だ。社殿まで足を伸ばした。有名な神社ではないので参拝客などいなかった。こんなときは、大胆に社殿のまわりの敷石や壁際の「際(きわ)」を探すことだ。すると、戸ぶたが目に入り込んだ。すぐに「赤旗」を地面に打ち込み、谷川さんに声をかけた。いつもの連携プレーで、またたく間にキムラグモのサンプルを集めることができた。先を急がねばならない。今日は鹿児島まで移動し、私は帰京せねばならなかった。天草ではまったくダメだったので、ひょっとすると対岸の熊本本土側も少ないかも知れないと心配したが、杞憂に終わった。葦北郡芦北町、水俣市葛渡と行くところ行くところ、次々とキムラは見つかり、順調にサンプルを集めることができた。やはり、九州本土にはキムラは豊産する。ならば、なぜ天草にいないのだろうか。たしかに、海峡が存在する。しかし、南西諸島には間断なく分布しているではないか。大分県の離島(佐伯市大入島や鶴見町大島など)にもキムラが分布するという。海峡の存在は理由にならないようである。一方、九州の北部にもキムラはいない。より正確に記せば、天草・長崎・佐賀・福岡北部にキムラは分布していないのだ。我々もこの理由をあれこれとよく議論するのだが、まだ見当がつかない。願わくは、DNAの分析データが解明への手がかりを提供してくれないかと期待するのだが……

八代から南へそれたので、九州自動車道を利用できず、一般道をたどって鹿児島方面へ進んだ。キムラも鹿児島に近づくほど豊産するところが多く、鹿児島市の石谷では取り残された旧道のがけ地に、それこそ「腐るほど」キムラがいた。ここでは「オスの戸ぶた」を狙って探したのだが、さすがに「これぞ、オスの戸ぶた」と決めることなど、できるはずもなかった。しかし、それができるのではないかと思わせるほどの個体数があった。

石谷を最後に鹿児島空港へと向かった。フライトの時刻までのあいだに夕食をかねて「反省会」。天草では「キムラがいない」ことの確認ができ、トタテの標本も集めることができた。九州本土ではキムラのオスを、亜成体を含めて採集することができた……。などを考え合わせると「まあ、良し」ということだろう。谷川さんは、今夜は国分泊まりだという。そして、大隈半島から北上し宮崎と大分を經由して、熊本まで戻るのだという。その「やる気」に脱帽である。

キムラグモを求めて ～ 佐多岬は遠かった

新海 明

もうかれこれ 30 年の昔になる。当時勤務していた高等学校の修学旅行の引率教員として、九州の各地を巡ったことがあった。太宰府天神、平戸の寺院と教会、牛深のハイヤ祭り、山鹿の灯籠踊り、国東の寺院や石仏、高千穂峡の神楽踊り、西都原の古墳群、鶴戸神宮、鹿児島島の磯庭園からみた桜島などなど、思い出は限りなく溢れてくる。

若気の至りだろう。「観光地なんて」と半分、馬鹿にして訪れた名所や旧跡に接し、生徒以上に感動している自分を見つけ、いつも密かにドギマギしていた。

おそらく、九州へは 3～4 回は行っているはずなのだが、そこでクモの採集や観察をした記憶がない。無論、生徒引率をしていたのだから、当たり前といえば当たり前である。けれども、その後に訪れた沖縄での修学旅行の際には、空き時間を利用して名護城で調査をした覚えがある。思うに、あの頃は学校の教員として夢中になって仕事をしていただろう。クモの研究を忘れていた時代が確かにあった。

一昨年（2007 年）から、谷川さんに誘われて九州へキムラグモやトタテグモを探しに通うようになった。きっかけは、私が九州でかつてクモタケ調査をやっていたことだった。九州でキムラを探すのは容易だが、トタテグモはそんなには甘くない。トタテグモ探しの「水先案内人」といったところであろう。だがこれは谷川さんサイドの動機だ。私サイドの動機は、気分転換の温泉巡りの旅といったところだろう。このところ、はからずも仕事が忙しくなり、なかなかクモ調査に出掛けられなくなってしまったのだ。夏の講習期間中などでは、1 日に 12 時間の授業をこなす日も少なくない。いい加減ぐったりしてしまう。谷川さんはそんな私の状況を知ってか知らずか、気分転換にと調査に誘い出してくれる。とにかく、クモと温泉三昧の日々は私にとって慈雨となるのは確かだ。

今年（2008）の九州行は 8 月下旬から 9 月だった。この時期キムラはオスの成体が現われるのだという。昨年の調査は 1 回目が宮崎から鹿児島東部、2 回目は熊本から鹿児島西部だった。調査ポイントはおおよそ決めてあったようだが、いきあたりばったりだった。しかし、今年は違った。羽田空港で見せてもらった旅程表には調査ポイントがあらかじめびっしりと書き込まれてあった。合計 20 箇所の調査地だ。ここでキムラを探してサンプルを採集しなければならない。天気も大雨が予想されており心配だった。

宮崎空港には昼に到着したが、昼食を抜きにしてすぐさま第 1 のポイントに向かった。日南市の飴肥の近傍だった。採集調査は順調にすべりだしたが、いざ昼飯にしようとして飴肥の町中でレストラン（九州ではジョイフルがたくさんある）やコンビニを探し



図 1. キムラの気配もなかった桜島



図 2. 北緯 31 度の看板



図 3. 佐多岬から望む開聞岳

たが、一向見当らない。「これはもうダメか、昼食抜きでもう一ヶ所頑張るしかない」と思った矢先に、「道の駅」に出会った。東京付近での調査のつもりで行くと、九州では「飯にありつけなくなる」ことを実感した。この経験はその後の 3 日間に活きた。

2 日目。宿泊地の都城市は朝から大雨だった。予定ではここから都井岬まで南下して、緯線にほぼ平行に桜島まで調べるはずだった。しかし、天気予報では雨雲は大隅半島を西から東に横切るようだ。ならば逆に桜島から都井に行ったほうが晴れ間に恵まれそうだ。桜島の古里温泉にはかつて宿泊したことがあった。私の記憶では桜島の北岸に位置していたように思っていたが、南岸だった。大正時代の噴石によって覆われた、まるで巨大な「鬼押し出し」の地であった。岩石の隙間にわずかに土が挟み込まれて、ここをくまなく探したが、キムラの存在の気配はまったくなかった。土砂降りの空はここで青空をまみえ、経路の変更は「吉」と出たようだ。垂水市へ下り、ここから東へ向かい都井岬を目指した。行く先々でキムラは見つかったが多くはなかった。昨年印象ではどこも豊産するようだったが、その原因は居そうな場所ばかりを調べたせいかも知れない。今年はポイントがあらかじめ決めてあり、そこで探さなければならなかったため「少ない」場所が増えたのかもしれない。ただ、唯一 JR 日南線の夏井駅のそばのポイントは、キムラが腐るほど見ら

れた。そして野生馬の都井岬までを往復し、今日の宿泊地は根占だった。大隅半島を東西に、「行って戻った」感じだ。根占に到着したのは 19 時を過ぎていた。町営の温泉施設だったが、ここは良かった。温泉といい、食事といい最高だった。土地のものを使った新鮮で安価な地味を感じさせる料理の数々。クモ合宿の候補地としても悪くはないだろう。「大隈半島合宿」。いかがだろうか。

3 日目は根占から一路南下し、いよいよ九州南端の佐多岬へ向かう。かつて何度か訪れた修学旅行でもここには来たことがなかった。日本地図を見れば一目瞭然なのだが、私の印象は大きく違っていた。私の頭の中の地図では根占は大隅半島の先っちょに位置

していたのだ。だから、佐多岬はほんの目と鼻の先のはずだった。ところが、である。ここからが長かったのだ。対岸の薩摩半島から眺めれば分かりやすいのだが、高い山並みが大隅島の先端まで続く。この山並みの下を崖にへばりつくように国道は延びていた。所々に崖崩れをふせぐトンネルが現われる。根占から 30 km も離れて佐多岬は存在した。鹿児島錦江湾の広さを初めて実感した。そして、ここから見た開聞岳は筆舌に尽くしがたいほどの絶景である。桜島は遠く霞んで見えなかった。車は佐多岬に着く直前に北緯 31 度の緯線の標識を通過した。九州の南端に達したことが実感できた。やっと佐多岬へ到着した。駐車場は広くその先にトンネルがあり、植物園と遊歩道があるようだが、時間がなかった。あわただしく佐多岬見学を済ませ、集落周辺に戻りキムラの採集をした。ここは人家の入り口の崖地だったのだが絶好のポイントだった。キムラは豊産し、あっという間に採れた。

次に、来た道をいったん根占まで戻り、今度は東へと大隅半島に分け入った。目指すは内之浦の宇宙ロケット基地だ。根占の町を横切るときに遠くの山肌に巨大な岩壁を見つけた。「あの岩山は何物か」と車を走らせていると次第に岩壁が近づいてくるのではないかと。そばまで行って正体がわかった。コンクリの吹きつけだ。がけ崩れを防ぐために道路の上面を覆いつくしていたのだ。それにしても巨大な吹きつけだ。その峠を過ぎると大隈半島は山また山だった。が・・・、道路はよく整備されていた。キムラの生息ポイントを探すために道路わきの斜面に目をやった。よく整備された道路が「まずかった」のだ。崖は新しい防護壁で固められている。仕方なく、わき道に入った。やっと、それらしい崖がのぞいているのを発見した。車を道路わきに止めて探し始めると・・・「いた」。谷川さんがすぐに掘り取りを始めた。私は次のキムラを探す。だが、あまりたくさんはいないようだ。道路わきに側溝があり、その上の崖地にいそう。落ちないようにと注意しながら探していたつもりだったが、やってしまった。足をふっと滑らせ、側溝にはまり、したたか左足を打ってしまった。幸い打撲と擦りむき傷だけですんだがヒヤッとした。ここでの採集の成果はあまり芳しくはなかったが、一応採れたことは採れた。そこで、次のポイントの内之浦へと向かった。ロケット基地は海岸沿いにあった。テレビで見たのとは違う角度で現れた。「ああ、こんなところにあったんだ」と妙に納得した。県道はなお整備中で橋の架け替えが行われていた。ここは正式には鹿児島宇宙空間観測所と今は言うらしい、このロケット基地を横に見やりながら先を急いだ。何しろ今日はこの先にある北方(きたかた)を經由して再び根占まで戻り、フェリーで錦江湾を渡り指宿まで行かねばならない。国見トンネルの手前のコンビニで遅い昼食をとり、肝付町を経て根占港へと戻った。

錦港湾を渡るフェリーにはかつて乗船したことがある。そのときは対岸の薩摩半島の山川港からだった。生徒を引率していたせい、周辺の景色などの記憶がない。あらためて見た夕景の大隈半島の山並みは見事であった。海を渡る風も涼やかだ。指宿の町が目印となる魚見岳が西陽を受けていた。指宿は昨年も宿泊したが、今宵の宿は前年とは違っていた。温泉は趣向を凝らしたなかなかのもので、湯加減も私好みのぬる湯でのんびり浸かることができた。ただ、朝食会場がいけなかった。最近はどこもバイキング形

式が主流でこれはこれで OK なのだが、この会場はテーブルが一行に並べられここにお客が次々に詰め込まれていったのだ。われわれの隣は新婚カップルとおぼしき二人連れであったが、おじさん達の中で話しづらそうだった。

さて 4 日目は、薩摩半島を西に進み、ついで東シナ海を左に臨みながら北上して半島を一周し鹿児島空港へ向かうコースだ。「イッシー」で有名な池田湖周辺でキムラを探したがここはあっという間に見つけられた。開聞岳の雄姿を垣間見ながら、付近一帯に広がるお茶畑の台地沿いにサンプリングを続けた。鹿児島県は静岡と並ぶお茶の産地なのだという。とくに穎娃（えい）茶が有名だそうだ。途上の枕崎から北に曲がり車を進ませたが、加世田というところで雨にたたられた。車中で雨宿りを繰り返しながらサンプリングを続けた。こんな状態だったが、薩摩半島でのキムラの採集は比較的順調に進んだ。そして、南九州自動車道へ入り鹿児島市をかすめて九州自動車道へと一気に向かった。谷川さんによるとキムラグモの DNA 分析ではわれわれにとって有名なあの加治木町付近、もっと正確に言えばその南側でタイプが分かれるのだという。帰りの飛行機の時間までまだ間があるので、この境界線を調べようということになった。といってもあてなど「ない」。ただ「勘」あるのみだ。地図を眺め、道路沿いの地形を見ながら、「あそこへ行こう」というほかに手はないのだ。分布の障害となる要因としては川の存在が考えられるので、始良町を流れる山田川の左右の岸でそれぞれキムラのサンプルを試みた。これらの調査の一連の結果は、そのうちに谷川さんの論文として報告されるであろう。

今回の九州南端でのキムラ探索調査は雨に祟られながらも、何とか終わらせることができた。ずっと行きたかった、私にとって未知の大隈半島をくまなく巡ることができたし、薩摩半島周遊までおまけがついた。欲を言えば、枕崎から野間半島の先端にも足を踏み入れたかったが時間がなかった。また挑戦する機会もあるだろう。谷川さんと鹿児島空港で黒豚料理とビールでささやかな祝杯を挙げて帰途に着いた。

ワクドツキジグモを横浜市内で発見

水山 栄子

ワクドツキジグモが横浜市内の緑地で発見された。発見したのは秋山玲美さん（神奈川県横浜市）で発見時の様子を教えていただいた。また、採集後田中和徳さん（神奈川県逗子市）が写真撮影を行った。

「2010年11月19日10時頃、横浜市の円海山緑地、幅1.5m位の沢の脇道、地上30cmのスイセンの葉に止まっていた。葉にべったりと密着していたので何かの排泄物かと思った。親指の腹で強く押すと、3度目でコロッとミル瓶に落ちた。ルーペで足が見えて蜘蛛と分かった。しばらく、丸まったそのままの状態でした。後で、親指の左側面が茶色くなっていたので、蜘蛛を強く押しつけたせいなのかと思ったが定かでない。30分程でこの色は消えた。」（秋山私信による）

このワクドツキジグモを預かり、飼育を試みた。しかし、小さな網のようなものは作ったが、餌を全く食わず、12月4日に死亡した。液浸標本にして国立科学博物館に登録した。体長4.9mm、腹部の幅7.3mm、メスの幼体で、体色が図鑑で見る成体の写真とはまるで違って鮮やかなオレンジ色が交じる美しい個体であった。



横浜市内で発見されたワクドツキジグモ

千葉県野田市の温室内で採集されたクロガケジグモ

萩野 康則

筆者は2008年6月に、千葉県野田市の温室内で特徴的なボロ網を発見し、そこからクロガケジグモと思われるクモを採集した。貞元己良氏にお送りして確認して頂いたところ、クロガケジグモに間違いのないとのことであった。この採集記録に関しては、貞元氏ご自身が談話会合宿参加記の中で、千葉県初記録として紹介されている（貞元2009, p. 2, ll. 25-34）。

過日、この温室を再訪したところ、相変わらず多数のボロ網があり、クモも若干個体

採集できたので、2008年の記録とあわせて報告する。

クロガケジグモ *Badumna insignis*

♀成体 1 個体, ♂成体 2 個体, ♀亜成体 1 個体

2008年6月9日 千葉県野田市清水 清水公園内園芸ショップ温室内
萩野康則採集 貞元己良同定

♀成体 2 個体, 幼体 2 個体 (千葉県立中央博物館所蔵 登録番号: CBM-ZA 869)

2010年10月7日 千葉県野田市清水 清水公園内園芸ショップ温室内
萩野康則採集・同定 谷川明男確認

なお、園芸ショップの方のお話によれば、この特徴的なボロ網は、少なくとも10年以上前から見られているとのことであった。また、毎年冬には掃除をして網を取り除くが、次年にはまた網が張られるとの由であった。温室外にはこのボロ網は全く見られない。十数年前に、国内外のどこかの暖地から温室内に持ち込まれた園芸植物とともに移入され、温室内で繁殖・定着したものと推測される。

同定をしてくださった貞元己良氏、ならびに同定の確認をしてくださった谷川明男博士に感謝申し上げます。

引用文献

貞元己良 2009. ハラビロササヒメグモとフタホシヒメグモ (香川県の合宿に参加して).
Kishidaia, 95: 1-12.

東京都目黒区のマルゴミグモ

中島 晴子

東京都目黒区碑文谷の自宅の庭でマルゴミグモを観察しました。2010年6月4日、少し斜めに立っている2本のカイズカイブキの間、地上1.5 m くらいのところにマルゴミグモが垂直円網を張り、中心にとまっているのを見つけました。体長4, 5 mm で、斜め上に向かって体長と同じ大きさのゴミの球を3個等間隔に連ねていました。背を軽く指でつつくとプルプルと非常に細かく網を揺すります。6月30日、ゴミの球は4個になっていました(写真)。見るたびに面を変えて止まっていました。7月10日、ゴミの球は5個になっていました。キレ網のV字が広がってゆるのが分かりました。7月22日、網が壊され、本体が消えていました。



マルゴミグモの網

シロカネイソウロウグモが網に侵入したクモ類について 笹岡 文雄

シロカネイソウロウグモは主にジョロウグモの網に侵入し生活するという。筆者は2010年9月2日、伊豆諸島神津島においてそれ以外の種のクモの網にいるのを2例目撃したので報告したい。

1例は神津島村集落の倉庫に造網していたオオヒメグモの網に幼体1頭である。1例は島北西側海岸線にある「めいし公園」においてギンメッキゴミグモの網にやはり幼体1頭であった。この時の神津島はジョロウグモも生息しており、その網にもシロカネイソウロウグモを確認出来た。しかし侵入していた網は多くなく、またその数も1~2個体であった。したがって島のシロカネイソウロウグモの生息数が多く、ジョロウグモの網内も過密になっていたという理由ではないようである。

小管ら(1999)は横浜市(円海山)においてソウロウグモ類のホストについて調査している。その内、シロカネイソウロウグモのホストはジョロウグモの他にシロカネグモ類、アシナガグモ、オニグモの一種が記録されている。この調査からもシロカネイソウロウグモがジョロウグモ以外の網にも侵入することがわかる。

ただ筆者はシロカネイソウロウグモがオオヒメグモ、ギンメッキゴミグモの網に侵入したという事例を他に知らない。事例としては多くないと思われるのでここに報告する。

参考文献

小管恭平・高橋聡・安田明男. 1999. 円海山におけるイソウロウグモと円網種のクモとの関係. *Kishidaia*, 77:29-34.

北海道北見市常呂町で採集されたクモ

馬場友希・栗原 隆(農業環境技術研究所)

筆者らは2010年8月14日から16日にかけて北海道北見市常呂町栄浦(N 44° 07' 28", E 143° 58' 18")にてクモを採集する機会に恵まれた。採集場所はサロマ湖の湖岸で、ミズナラとカシワを主体とする比較的明るい林内で、特にミドリシジミ類が多く見られた。今回得られたクモは僅か4種であるが、そのリストを掲載する。採集は栗原 隆・俊子が行い、同定は馬場が行った。なお採集個体は全てメス成体であった。

<i>Philodromus auricomus</i> L.Koch 1878	キンイロエビグモ
<i>Oxyptila atomaria</i> (Panzer 1801)	アトムオチバカニグモ
<i>Prurolithus festivus</i> (C.L.Koch 1835)	タイリクウラシマグモ
<i>Marpissa milleri</i> (Peckham 1894)	オオハエトリ

マレーズトラップによる石垣島のクモ

馬場友希・(農業環境技術研究所)・松村 雄(那須塩原市)

筆者らは、1995年3月3日から25日にかけて沖縄県石垣島にて、マレーズトラップによりクモ類を採集する機会に恵まれたので、そのリストを掲載する。トラップの設置場所はバンナ岳と於茂登林道の2ヶ所で、設置期間は3/3-7, 3/7-13, 3/13-20, 3/20-25の計4回であった。トラップの設置と回収は松村が行い、クモの同定は馬場が行った。石垣島新記録となる種については種名に*をつけた。なお、Fはメス成体、Mはオス成体、yは幼体を表す。

1. *Episinus affinis* Bösenberg & Strand 190 ヒシガタグモ
バンナ岳: 1M 7-13.III. 1995.
2. **Phycosoma mustelinum* (Simon 1889) カニミジングモ
於茂登林道: 1M 7-13.III. 1995.
3. **Yunohamella lyrica* (Walckenaer 1842) シモフリヒメグモ
バンナ岳 1F 20-25. III. 1995.
4. **Congylidioides onoi* Tazoe 1994 オノヌカグモ
於茂登林道: 1F1M 20-25. III. 1995.
5. *Hylyphantes tanikawai* Ono & H. Saito 2001 イリオモテナンキングモ
バンナ岳: 1F1M 3-7. III. 1995.
6. **Tetragnatha makiharai* Okuma 1977 リュウキュウアシナガグモ
バンナ岳: 1M 13-20. III. 1995, 1M 20-25. III. 1995.
7. *Tetragnatha squamata* Karsch 1879 ウロコアシナガグモ
於茂登林道: 1F 13-20. III. 1995.
8. *Tetragnatha tanigawai* Okuma 1988 タニカワアシナガグモ
バンナ岳: 1F1M 7-13. III. 1995, 2F 20-25. III. 1995.
9. **Araneus iriomotensis* Tanikawa 2001 イリオモテオニグモ
バンナ岳: 1M 3-7. III. 1995. 於茂登林道: 1M 7-13. III. 1995.
10. *Cyclosa confusa* Bösenberg & Strand 1906 ミナミノシマゴミグモ
バンナ岳: 1F1M 3-7. III. 1995, 1M 13-20. III. 1995. 於茂登林道: 1y
13-20. III. 1995, 1M 20-25. III. 1995.
11. *Neoscona subpullata* (Bösenberg & Strand 1906) ヘリジロオニグモ
於茂登林道: 1F 20-25. III. 1995.
12. *Thelacantha brevispina* (Coleschall 1857) チブサトゲグモ
於茂登林道: 1y 20-25. III. 1995.

DRAGLINES

13. **Clubiona tanikawai* Ono 1989 タニカワフクログモ
於茂登林道: 1F 13-20. III. 1995, 1F 20-25. III. 1995.
14. **Otacilia lynx* (Kamura 1994) ヤマネコウラシマグモ
バンナ岳: 1F 13-20. III. 1995. 於茂登林道: 1F 13-20. III. 1995.
15. *Boliscus tuberculatus* (Simon 1886) イボカニグモ
バンナ岳: 1y 3-7. III. 1995, 3y 7-13. III. 1995. 於茂登林道: 1y 20-25. III.
1995.
16. *Diaea subdola* O. Pickard-Cambridge 1885 コハナグモ
於茂登林道: 1M 7-13. III. 1995.
17. *Oxytate hoshizuna* Ono 1978 ホシズナワカバグモ
バンナ岳: 1M 7-13. III. 1995.

伊豆諸島・神津島のクモ類

笹岡 文雄

概 観

神津島は東京都心から約 178 km, 北緯 34° 13' 東経 139° 9', 伊豆諸島のほぼ中間にあり, 最も西寄りに位置する. 面積 18.87 km², 人口約 2,100 人, 一島で一自治体 (神津島村) を形成する. 伊豆諸島有人島 9 島の内, 面積は 6 番目, 人口は 5 番目にあたる. 集落は南部西側の前浜地区約 4 km² の地域に集中している.

島の中央部に天上山 (標高 574.2 m) がありその山体が島のほぼ半分を占め, その山頂部分と空港のある南部の台地以外は基本的に斜面地である. 火山島であるが噴火については, 少なくとも 9 世紀を最後に起こっていない. 本島の東西に各, 無人の附属島嶼, 祇苗 (ただなえ) 島と恩馳 (おんばせ) 島がある.

平均気温は 17.4°C, 東京都心より約 2°C 高く, 降水量も都心より約 1,000 mm 以上多く温暖多雨である. しかし島の大きさから集水面積小さいこと, 火山性の土壤による浸透性が高いことにより顕著な陸水系はない. ただしウナギやエビの生息する沢があるという (神津島村史編纂委員会編 1998). 筆者も若干の流水系を確認できたがいずれも海まで達するほどのものはなかった. 植生は天上山地域を除き, 基本的に箱根天城山系統の照葉樹林帯でありスダジイを中心とした原生林が多く残っている.



図 1. 神津島の位置



図 2. 神津島の地形

調査概要

調査は2010年8月31～9月2日、見つけ採りを中心に行なった。一部の場所のみ補虫網を用いてスウィーピングによる採集も合わせて行った。採集したもののみ記録し、目撃のみの種は除外した。このため、一部のクモ（ジョロウグモなど）では島内に広く分布していたが、採集は最小限のため記録地点は少ないものがある。

なお、天候は8月31日晴、9月1日晴一時曇、2日晴であった。

目録

個体記号

F ♀成体, f ♀幼体, M ♂成体, m ♂幼体, y 雌雄不明幼体

採集地略号:

物忘奈（物忘奈命神社境内および周辺）、えんま（えんま洞周辺）、前浜（前浜）、与種（与種広場周辺）、黒島（黒島登山道）、沢尻（沢尻湾周辺）、めいし（めいし公園内）、日向（多幸湾・日向神社境内および周辺）、キャン（多幸湾・キャンプ場周辺）

1. トタテグモ科 Ctenizidae

1. キノボリトタテグモ *Conothele fragaria*

1F 1-IX-2010 キャン, 1F 1-IX-2010 黒島

2. チリグモ科 Oecobiidae

2. チリグモ *Oecobius navus*

1f 31-VIII-2010 物忘奈

3. タナグモ科 Agelenidae

3. コクサグモ *Allagelena opulenta*

1f 31-VIII-2010 えんま

4. コモリグモ科 Lycosidae

4. ウヅキコモリグモ *Paradosa astrigera*

3F 1-IX-2010 前浜

5. ヒラタグモ科 Urocteidae

5. ヒラタグモ *Uroctea compactilis*

1y 31-VIII-2010 物忘奈

6. ヒメグモ科 Theridiidae

6. オオヒメグモ *Achaearanea tepidariorum*

1F 31-VIII-2010 えんま, 1F 1-IX-2010 日向

7. シロカネイソウロウグモ *Argyrodes bonadea*

2F 1-IX-2010 日向, 1y 1-IX-2010 黒島, 1F 2-IX-2010 えんま, 1y

- 2-IX-2010 めいし
8. ヒシガタグモ *Episinus affinis*
1m 1-IX-2010 日向
9. フタオイソウロウグモ *Neospintharus fur*
1F 1-IX-2010 日向
10. ニホンヒメグモ *Parasteatoda japonica*
1F 1-IX-2010 日向
7. ジョロウグモ科 Nephilidae
11. ジョロウグモ *Nephila clavata*
1F 2-IX-2010 えんま, 1F 2-IX-2010 めいし
8. アシナガグモ科 Tetragnathidae
12. チュウガタシロカネグモ *Leucauge blanda*
1y 31-VIII-2010 えんま, 1F 1-IX-2010 日向
13. ヤマジドヨウグモ *Meta reticuloides*
1F 1-IX-2010 日向
9. コガネグモ科 Araneidae
14. ヤエンオニグモ *Araneus macacacus*
1F 2-IX-2010 えんま
15. ナガコガネグモ *Argiope bruennichii*
1F 1-IX-2010 与種, 1M 1-IX-2010 キャン
16. ギンメツキゴミグモ *Cyclosa argenteoalba*
1y 31-VIII-2010 物忘奈, 1F 2-IX-2010 めいし
17. ミナミノシマゴミグモ *Cyclosa confusa*
1F 31-VIII-2010 物忘奈
18. マルゴミグモ *Cyclosa vallata*
1F 1-IX-2010 日向
19. ワキグロサツマノミダマシ *Neoscona mellottei*
1F 2-IX-2010 沢尻
20. ヘリジロオニグモ *Neoscona subpullata*
1y 3-VIII-2010 物忘奈
21. サツマノミダマシ *Neoscona scyllouides*
1F 2-IX-2010 沢尻
10. エビグモ科 Philodromidae
22. シャコグモ *Tibellus japonicus*
1y 1-IX-2010 日向, 1y 2-IX-2010 えんま
11. カニグモ科 Thomisidae
23. コハナグモ *Diaea subdola*

- 3y 1-IX-2010 日向
24. アズチグモ *Thomisus labefactus*
1M 1-IX-2010 与種, 1M 2-IX-2010 えんま
25. ヤギヌマノセマルトラフカニグモ *Tmarus yaginumai*
1F 1-IX-2010 日向
12. ハエトリグモ科 Salticidae
26. ヤマジハエトリ *Asianellus festivus*
1M 31-VIII-2010 物忘奈
27. ネコハエトリ *Carrhotus xanthogramma*
2y 1-IX-2010 日向, 1y 2-IX-2010 えんま
28. イソハエトリ *Hakka himeshimensis*
1M 1-IX-2010 前浜
29. コジャバラハエトリ *Helicius cylindratus*
1F 31-VIII-2010 物忘奈
オスクロハエトリ属の一種 *Mendoza* sp.
1y 2-IX-2010 えんま
30. チャスジハエトリ *Plexippus paykulli*
1F 31-VIII-2010 物忘奈
31. カラスハエトリ *Rhene atrata*
1F 1-IX-2010 日向
32. アオオビハエトリ *Siler vittatus*
1y 31-VIII-2010 物忘奈
33. シラヒゲハエトリ *Menemerus brachygnathus*
1F1y 31-VIII-2010 物忘奈
- 12 科 33 種

クモ相概観

神津島のクモ類の記録は仲辻 (1942) から始まる。その後は仲條 (2008) まで散発的に 9 件の報告がなされた。内容の概要は以下の通りである。

仲辻 (1942) 26 種, 大野・八木沼 (1968) 38 種 (内, 新記録 14 種), 大河内 (1969) 9 種, 松本 (1970) 52 種 (内, 新記録 10 種), 国見 (1986) 5 種, 東京都港湾局 (1987b) 40 種 (内, 種名未確定 2 種), 東京都港湾局離島港湾部建設課 (1993) 49 種 (内, 種名未確定 1 種), 池田・伴 (1999) 42 種 (内, 種名未確定 1 種, 只苗島記録 8 種), 小野 (2001) 67 種 (内, 新記録 1 種), 仲條 (2008) 23 種。

この内, 大野・八木沼 (1968) は仲辻 (1942) とを集計, 松本 (1970) は仲辻 (1942), 大野・八木沼 (1968), 大河内 (1969) とを集計, そして小野 (2001) は仲辻 (1942),

大野・八木沼（1968），大河内（1969），松本（1970），池田・伴（1999）を集計している。各報告とも集計の他，新記録を加え目録としている。

筆者はこれらを小野（2009）に基づいて古い和名・学名は現在のものに転換し，分類体系もそれによって再集計を行った。その結果，神津島産のクモ類は 19 科 90 種となった。

今回の調査で新たに記録されたのは，キノボリトタテグモ，チリグモ，フタオイソウロウグモ，ヤマジハエトリ，イソハエトリ，コジャバラハエトリ，チャスジハエトリ，シラヒゲハエトリの 8 種である。それらを新たに加えると，神津島のクモ類は 21 科 98 種となった。

集計にあたって仲辻（1942）が記録したヒロセハエトリはヤハズハエトリ（池田 1998），（池田，伴 1999）とされているが，それは神津島本島から記録でないため集計から除外した。さらに池田・伴（1999）が記録した只苗島産の種のうち，同じく本島で記録がないハイイロヒメグモも除外した。また仲辻（1942），松本（1970），池田・伴（1999）はシマゴミグモを記録しているが，ミナミノシマゴミグモとして集計はしていない。

なお，神津島空港の環境アセスメントに関する 2 つの報告（東京都港湾局 1987b），（東京都港湾局離島港湾部建設課 1993）は一般的に知られていない文献である。しかし新記録種も多く含まれ貴重な報告となっているため，以下に若干の解説をしておく。

東京都港湾局（1987b）38 種，東京都港湾局離島港湾部建設課（1993）48 種であるが共通種を整理し集計すると 62 種が記録されている。他の報告に記載のない種はムナボシヒメグモ，ハラクロコモリグモ，イモコモリグモ，カバキコマチグモ，ヒメフクログモ，ヤバネウラシマグモ（東京都港湾局 1987b），スネグロオチバヒメグモ，タテヤマテナガグモ，サガオニグモ，ウロコアシナガグモ，ハラクロコモリグモ，ヒノマルコモリグモ，ヒメフクログモ，ニッポンオチバカニグモ，デーニツツハエトリ（東京都港湾局離島港湾部建設課 1993）であった。調査地域は現在空港がある南部の面房台地のみで，期間は東京都港湾局（1987b）1983 年 7 月 7～9，15～17 日，東京都港湾局離島港湾部建設課（1993）1992 年 7 月 22～24 日，同 10 月 20～22 日。共に詳細な採集日および個体の雌雄，成幼体の区別，採集頭数の記載はない。

謝 辞

神津島のクモ類をまとめるにあたって，東京農工大学教授国見裕久博士にお譲りいただいた文献が非常に役立った。重ねて厚くお礼申し上げる。

参考文献

- 池田博明 1998. ヒロセハエトリを求めて. *Kishidaia*, 75:13-18.
池田博明・伴 満 1999. 夏の神津島のクモ. *Kishidaia*, 76:55-58.
神津島村史編纂委員会（編） 1998. 神津島村史. 神津島村, 1190pp.,pls.1-20.
国見裕久 1986. 伊豆七島の地上徘徊性無脊椎動物. *島の生物*, 1(13-15):118-124.

- 松本誠治 1970. 神津島産真正蜘蛛類目録. 採集と飼育, 35:41-47.
- 仲條竜太 2008. 神津島のクモ. *Kishidaia*, 93:60-61.
- 仲辻耕次 1942. 伊豆七島産蜘蛛類に就いて. 東京農業大学農業輯報, 1:287-328, pls. XI-XII.
- 東京島嶼町村会 1984. 黒潮に生きる東京・伊豆諸島, 下. 東京島嶼町村会, 309pp.
- 大河内哲二 1969. 各地のクモ同定記録. *Kishidaia*, 9:3-6.
- 大野正男・八木沼健夫 1968. 新島・式根島・神津島の真正蜘蛛類. 東洋大学紀要, 教養課程編 (自然科学), 10:17-29.
- 小野展嗣 2001. 伊豆諸島のクモ類. 国立科学博物館専報, 37:261-277.
- 小野展嗣 (編) 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会, 738pp.
- [東京都港湾局 編] 1987a. 環境影響評価書: 神津島空港整備事業. 東京都港湾局離島港湾部, 169pp.
- [東京都港湾局 編] 1987b. 環境影響評価書: 神津島空港整備事業資料編. 東京都港湾局離島港湾部, 243pp.
- 東京都港湾局離島港湾部建設課. 1993. 事後調査報告書: 神津島空港整備事業工事完了後その 1. 東京都港湾局離島港湾部建設課, 120pp.

伊豆諸島・三宅島における地中性クモ類及びその他のクモ

笹岡 文雄

概観

三宅島は都心より約 180 km, 緯度 34° 5' 経度 139° 31' に位置する. 面積 55.14 km², 周囲 35.9 km 伊豆諸島の中で大島, 八丈島に次ぐ大きさである. 人口は約 2,800 人, 一島で一行政区画 (三宅村) を形成する.

島はほぼ円形を呈し中央部に海拔 775 m の雄山がある. 典型的な海洋性気候であり, 東京都心に比して年間降水量はほぼ倍, 年平均気温は約 1.5°C 高い. 南側に火口湖である大路池 (周囲 2.1 km, 面積 120,000 m², 深さ 50 m) があるが, その他の陸水系はない. 原生植生はスダジイやタブを中心とする照葉樹林で, その他植栽されたオオバヤシヤブシが優先する広葉樹 2 次林も広範囲に分布していた. しかし 2000 年の雄山噴火による溶岩流出によって失われた植生は現在も回復途上である. 標高約 450 m より上部では依然として全ての植生が消失したままで, 回復の兆しはない. また 1 日数千トン単位で発生する火山ガスの影響も続いている. 島の北部は有史以来溶岩流出もなく, かつ火山ガスの影響も少ない為, 噴火以前の植生が維持されているが原生植生は少ない. 雄山は気象庁によって火山活動度ランク A に指定され 2000 年を含め有史以来 13 回の噴火の記録がある. したがって三宅島は周期的に噴火による植生の消滅, 回復を繰り返しており, 現況も自然史の視点からは一過性のものにすぎない.



図 1. 三宅島の位置



図 2. 三宅島の地形

調査概要

調査は2010年6月27～29日、見つけ採りを中心に行なった。また必要に応じて補虫網を用いスウィーピングによる採集も併用している。採集したもののみ記録し、目撃のみのはキノボリトタテグモを除き記録していない。なお天候は27日曇、28日曇のち晴、29日晴であった。

目録

個体記号

F ♀成体, F ♀幼体, M ♂成体, M ♂幼体, y 雌雄不明幼体

採集地略号

阿・富（阿古・富賀神社境内および周辺）、阿・火（阿古・火戸寄神社周辺）、阿・鏜（阿古・鏜ヶ浜）阿・郵（阿古・鏜ヶ浜港～阿古郵便局間都道212号沿道）、阿・メ（阿古・メガネ岩付近）、坪・立（坪田・立根橋付近）、坪・都道（坪田・新濤池～大路池間都道212号沿道）、神・交（神着・交通公園周辺）、神・土（神着・土佐地区）、神・島（神着・旧島役所跡）、神・子（神着・子安宮周辺）神・浅（神着・浅沼稻次郎生家付近）

1. ジグモ科 *Atypidae*

1. ジグモ *Atypus karschi*

1F 28-VI-2010 神・島

2. トタテグモ科

2. キノボリトタテグモ *Conothele Fragaria*

1F 27-VI-2010 坪・立, 1y 28-VI-2010（確認のみ採集せず）神・浅, 3y 28-VI-2010（確認のみ採集せず）神・子

3. キシノウエトタテグモ *Latouchia typica*

2F1y 28-VI-2010 神・浅

3. チリグモ科 *Oecobiidae*

4. チリグモ *Oecobius navus*

1F 27-VI-2010 阿・郵

4. タナグモ科 *Agelenidae*

5. コクサグモ *Allagelena opulenta*

1f 28-VI-2010 阿・火

5. コモリグモ科 *Lycosidae*

6. ウヅキコモリグモ *Paradosa astrigera*

1F2M 27-VI-2010 坪・都道

ヤチグモ科 *Coelotidae*

ヤチグモの一種 *Coelotes* sp.

1y 27-VI-2010 阿・郵

6. ヒメグモ科 Theridiidae

7. オオヒメグモ *Achaearanea tepidariorum*

1F 27-VI-2010 坪・都道, 1f1y 27-VI-2010 阿・郵

8. チリイソウロウ *Argyrodes kumadai*

1m 28-VI-2010 坪・都道

9. フタオイソウロウグモ *Neospintharus fur*

1F 27-VI-2010 阿・郵

10. コンピラヒメグモ *Parasteatoda kompirensis*

1M 27-VI-2010 阿・郵

ヒメグモの一種(1) *Parasteatoda* sp.

1y 27-VI-2010 坪・都道

ヒメグモの一種(2) *Parasteatoda* sp

1y 29-VI-2010 阿・火

11. ハンゲツオスナキグモ *Steatoda cingulata*

1F 27-VI-2010 阿・鏝

7. ヨリメグモ科 Anapidae

12. ナンブコツブグモ *Mysmenella pseudojobi*

1f1M 坪・都道

8. サラグモ科 Linyphiidae

13. クロケシグモ *Meioneta nigra*

1F 27-VI-2010 阿・郵

14. ヘリジロサラグモ *Nerienne oidedicata*

1F 27-VI-2010 坪・都道

9. アシナガグモ科 Tetragnathidae

15. チュウガタシロカネグモ *Leucauge blanda*

1F 27-VI-2010 阿・郵

10. コガネグモ科 Araneidae

16. ハツリグモ *Acusilas coccineus*

1M 29-VI-2010 阿・火

17. オニグモ *Araneus ventricosus*

1y 27-VI-2010 阿・郵

18. ナガコガネグモ *Argiope bruennichii*

1y 27-VI-2010 阿・富

19. コガタコガネグモ *Argiope minuta*

1y 27-VI-2010 坪・都道, 1y 28-VI-2010 阿・火

20. ミナミノシマゴミグモ *Cyclosa confusa*
 1F 27-VI-2010 坪・都道, 1F 27-VI-2010 阿・郵
21. ヘリジロオニグモ *Neoscona subpullata*
 1F 27-VI-2010 坪・都道
 オニグモの一種 *Neoscona* sp.
 1y 27-VI-2010 阿・郵
11. ワシグモ科 Gnaphosidae
22. ヒメチャワシグモ *Cladothela parva*
 1M 28-VI-2010 神・島 (加村隆英同定)
 ワシグモの一種 *Cladothela* sp.
 1y 29-VI-2010 阿・メ
23. メキリグモ *Gnaphosa akagiensis*
 1F 27-VI-2010 阿・富
12. カニグモ科 Thomisidae
24. ハナグモ *Misumenops tricuspidatus*
 1M 28-VI-2010 神・交
13. ハエトリグモ科 Salticidae
25. マツモトハエトリ *Bristowia heterospinosa*
 1M 28-VI-2010 神・土
26. イソハエトリ *Hakka himeshimensis*
 1M 27-VI-2010 阿・鏑, 1M1y 28-VI-2010 阿・鏑, 1F1y 29-VI-2010
 阿・鏑
27. ミスジハエトリ *Plexippus setipes*
 1M 27-VI-2010 阿・富
28. カラスハエトリ *Rhene atrata*
 1M 29-VI-2010 阿・火
- 13科 28種

クモ相概要

三宅島の採集記録は戦前からあり、伊豆諸島においては大島に次いで古い（仲辻 1939）。仲辻（1942）の伊豆諸島のクモ類の報告以後は全て戦後の記録である。

戦後は断続的に報告がなされ、2001年小野によって伊豆諸島のクモ類の集計が行われ、三宅島のクモ相の一端も判明した。

仲辻以下の記録の概要は以下の通りである。

仲辻（1939）11種（1942）14種、岸田（1961）2種、大河内（1969）21種、八木沼・新海（1971）1種、Ono（1977）1種、鈴木（1977）1種、八木沼・新海（1979）

1種, Ono (1984) 1種, Ono (1985) 1種, 国見 (1986) 8種, Ono (1988) 2種, 谷川 (1989) 9種, Tanikawa (1992) 1種, Ono & Saito (2001) 1種, 山本 (2002) 13種, 谷川 (2006) 1種, 高橋 (2009) 13種 (未確定 3種を除く), 仲條ほか (2009) 29種. 小野 (2001) の集計は 65 種であるがその内, 22 種を自ら新たに記録している.

これらを小野 (2009) に基づいて古い和名・学名は現在のものに転換し, 分類体系もそれによった. さらに小野 (2001) 見解に従い学名が有効でない正体不明種は除外した. それらを再集計した結果, 三宅島のクモ類は 30 科 93 種であった.

なお, 仲辻 (1942), 山本 (2002) はシマゴミグモを記録しているが, 本稿はミナミノシマゴミグモとした.

またホシヒメグモモドキが「三宅島史」(東京都三宅村役場 1982) に記録されているが詳細が明らかではなく, また同書のクモ類参考文献となっている「東京都産真正蜘蛛類」(新海 1967) にも記載がないため集計から除外した.

これに今回初めて記録されたチリグモ, フタオイソウロウグモ, コンピラヒメグモ, ナンブコツブグモ, クロケシグモ, ハツリグモ, ヒメチャワシグモ, マツモトハエトリ, ミスジハエトリの 9 種を加えると三宅島のクモ類は 32 科 102 種となる.

地中性種概観

過去にキシノウエトタテ, キノボリトタテ, ワスレナグモ, ジグもの 4 種が記録されている.

キシノウエトタテは東京大学総合研究博物館に, 三宅島産の標本が収蔵されている(谷川 2006). その標本ラベルの記載は Miyake-jima, Izu, 31/III/'24, となっており採集者の記載はない.

同種の伊豆諸島における最も古い記録であるが, ラベルの日付とキシノウエトタテの出現時期(9~10月)にずれがあること, その後 90 年近く未記録であったこと, ♀は徘徊して移動することなどから実際に三宅島産のものか若干の疑義がある.

東京大学の標本が今回確認できた個体群に由来するものか, 現在においては確認するすべはない. しかしながら現在, 三宅島にキシノウエトタテが分布していることは確定できた.

確認した分布場所は, 高さ約 0.8~2.5 m の断続的な道路切通の片面で長さ約 120 m に渡って生息していた. 採集は 3 個体のみだが, 蓋開け等によって成体から住居直径数 mm の幼体の各ステージ 50 個体まで確認できた.

キノボリトタテは島内 3ヶ所(坪田, 神着 2) で個体をその他 1ヶ所(阿古) で廃巢を確認した. いずれの場所も互いに距離があり, その他島内に広く分布している可能性がある.

過去、三宅島では3例(岸田 1961), 山本(2002), 小野(2001)の記録がある。但し岸田(1961)の記録は採集年月日, 場所など詳細を明示せず, 標本の所在も不明である。また小野(2001)は幼体を採集, 報告している。

ジグモは仲辻(1936,1942)以来, 現在まで記録がなかった。

ジグモについては今回, 島北部神着地区(旧島役所跡)にて2個体の巣を確認した。その内1頭を採集したところ, ♀成体であった。他1個体は採集せずそのままとしたが巣の大きさがほぼ同じことからクモは成体であると推定した。

ワスレナグモもジグモと同じく仲辻(1936,1942)以来記録がないが, 今回も確認できなかった。

謝 辞

追手門学院大学教授加村隆英博士には, 急なお願いにもかかわらずヒメチャワシグモの同定を快くお引き受けいただいた。東京農工大学教授国見裕久博士には, 入手困難な貴重文献を不躰なお願いにもかかわらずお分けいただいた。三宅島自然ふれあいセンターアカコッコ館には, 同じく貴重な文献をおくっていただいた。お二方とアカコッコ館には感謝に堪えない。ここに誌面を借り厚くお礼申し上げたい。

参考文献

- 岸田久吉 1961. 伊豆諸島の動物. どうぶつと動物園, 13(5):16.
国見裕久 1986. 伊豆七島の地上徘徊性無脊椎動物. 島の生物, 1(13-15):118-124.
東京都三宅村役場 1982. 三宅島史. 東京都三宅村役場, 999pp.
仲辻耕治(原文ママ) 1936. 伊豆三宅島採集記. *Acta arachnologica*, 1:67-72.
仲辻耕次 1942. 伊豆七島産蜘蛛類に就いて. 東京農業大学農業輯報, 1:287-328, pls.XI-XII.
仲條竜太・終雅実・中西亜耶 2009. 伊豆諸島三宅島で採集したクモ. *Kishidaia*, 95:49-52.
鈴木勝浩 1977. 三宅島にいたオダガグモ. *Kishidaia*, 42:43.
高橋 登 2009. 三宅島のクモ. *Kishidaia*, 96:94-95.
東京島嶼町村会 1984. 黒潮に生きる東京・伊豆諸島, 下. 東京島嶼町村会, 309pp.
大河内哲二 1969. 各地のクモ同定記録. *Kishidaia*, 9:3-6.
Ono, H. 1977. Thomisidae aus Japan I. Das Genus Simon (Arachnida: Araneae). *Acta Arachnologica*, 27 (special number): 61-84.
Ono, H. 1984. The Thomisidae of Japan IV. *Boliscus Thorell, 1891* (Arachnida. Araneae), a genus new to the Japanese fauna. *Bulletin of the National Science Museum, Tokyo, Series A.* 10(2): 63-71.
Ono, H. 1985. Revision einiger Arten der Familie Thomisidae (Arachnida, Araneae) aus Japan. *Bulletin of the National Science Museum, Tokyo, Series A.* 11(1): 19-39.
Ono, H. 1988. A revisional study of the spider family Thomisidae (Arachnida, Araneae) of Japan. *National Science Museum, Tokyo*, 252pp.
小野展嗣 2001. 伊豆諸島のクモ類. 国立科学博物館専報, 37: 261-277.
Ono, H. & S. Saito 2001. New species of the family Linyphiidae (Arachnida. Araneae) from Japan. *Bulletin of the National Science Museum, Tokyo, Series A.* 27(3): 159-203.
小野展嗣(編) 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会, 738pp.
新海栄一 1967. 東京都産真正蜘蛛類. 東亜蜘蛛学会, 65pp., pls.1-10.

- 谷川明男 1989. 田中徳久氏採集による各地のクモ同定記録 沖縄, 小笠原, 硫黄島, 三宅島, 真鶴, 八ヶ岳, 清里, 北海道. *Kishidaia*, 58: 50-55.
- Tanikawa, A. 1992. A revisional study of the Japanese spiders of the genus *Cyclosa Menge* (Araneae: Araneidae). *Acta Arachnologica*, 41(1): 11-85.
- 谷川明男 2006. 東京大学総合研究博物館動物部門所蔵無脊椎動物標本リスト: 東京大学総合研究博物館所蔵クモ類標本目録. 東京大学総合研究博物館標本資料報告, 62: 115-125.
- 八木沼健夫・新海栄一 1971. 分布資料 [1]. *Atypus*, 57: 18.
- 八木沼健夫・新海栄一 1979. 分布資料. *Atypus*, 74: 51-52.
- 山本 裕 2002. 三宅島における蜘蛛の観察記録. *Miyakensis* (三宅島ふれあいセンター研究報告), 8: 7-8.

多摩川是政橋近辺のクモ

莊 司 康 治 郎

はじめに

多摩川は埼玉県の笠取山に始まり奥多摩湖を経て東京都を巡り、神奈川県との県境として東京湾に注ぐ一級河川である。その支流である大栗川との合流点（多摩市）は都内有数の探鳥スポットとして知られている。是政橋はそこから 1 km ほど下った中流域に位置し、北側の府中市と南側の稲城市を結ぶ府中街道を渡す斜張橋である。

ここには故あって複数回私的クモ調査に訪れたが、広域な多摩川河川敷でこの地を選んだ理由は「ついででの用事があった」「交通の便がよい」「バードウォッチャーや行楽客等が比較的少ない」ということだけである。地理的要因に何か期待するものがあったわけではなく、ここから 1 km 上流もしくは下流域にどのようなクモが生息しているか等についてはまったく調べていない。また、文中に「かなり」「たくさん」等の主観的表現が出てくるのはご容赦願いたい。そのような表現で自分なりにまとめないと大まかに書くことも出来ない「広さ」を持つ環境なのである。

河川敷のクモ相は「特異」であり、東京都の正式な記録としてはほとんど報告されていないクモも数種確認された。その内容を論文形式で詳しく書くのは調査不足であるし、何よりも骨が折れる。そこで印象に残ったクモだけまとめて箇条書き風に列挙してみた。文中における種名の並び順に意味はない。データは特に表記がない限りすべて 2010 年度のものである。クモの分布や生態調査等をされている方々に少しでも参考となれば幸いである。

特筆すべきクモの分布・生態

1. タカノハエトリ *Heliophanus lineiventris* Simon 1868

「珍しいクモ」という認識はなかったが、「CD 日本のクモ ver. 2010」では妙に記録が少なく東京都からの報告もない。実は私も今回初めて本種を見た。河川敷や海岸に頻繁に出向く人以外には案外馴染みの薄いクモなのかも知れない。5月初旬、乾燥した荒地で掌 2 個分ほどの石を起こしたところ、2♀及びその住居産室、1♂が見つかった。雌雄 3 個体の姻戚関係は不明。石下ではハサミムシの一種とほとんど同居状態だったが、何らかの干渉・共生関係等があるようには見えなかった（2010.05.04 ほか）。

2. クロツヤハエトリ *Sibianor nigriculus* (Logunov & Wesołowska 1992)

「CD 日本のクモ ver.2010」では非常に記録が少ない。あまり馴染みのない、典型的な「河川敷のクモ」なのかも知れない。♂は和名のとおり黒くてツヤがあるが(図 1-1)、♀の背面は短毛で密に覆われているため、野外では灰～紫色がかって見える(図 1-2)。丈の低い草本が疎らに生える荒地～コンクリート護岸にかけて数個体確認された。同環境下にクワガタアリグモ、ヒゲナガツヤグモ等も生息してる。同所でも岸寄りの、やや湿った広葉樹の落葉がたまっているような場所には同属のキレワハエトリ *S. pullus* およびタイリクアリグモなど一般の平地～谷戸等で見られる種が目立つようになる。クロツヤハエトリの♀は石や草本の高い位置に上るような動作は見られず、スッと動いてそのままじっとしている。自らが「目立たない」存在であることを認識しているようだ。ビーティングはもちろんスニーピングやシフティングさらにはルッキングでも採りにくいような印象を受ける。ある意味特殊とも呼べる生息環境と行動パターンが採集記録の少ない原因なのかもしれない。ただ♂は移動等のために護岸のコンクリートや倒木・木柵の上(阿部汎孝氏私信)など目立つ場所に出てくることも少なくないようである(2010.05.22 ほか)。

3. クワガタアリグモ *Myrmarachne kuwagata* Yaginuma 1967

本種も「河川敷のクモ」と呼んで差し支えないのではないだろうか。2004年にクモ見を始めてアリグモ *M. japonica* とヤサアリグモ *M. inermichelis* はすぐに見つけることができた。タイリクアリグモ *M. formicaria* も程なく見つかった。2008年に東京都小金井市でヤガタアリグモ *M. elongata* ♂を初確認した。しかしクワガタアリグモだけはどうしても見つからない。丸々5年間空振り続きとなった。本州で普通に見られるとされるアリグモ属のうち、なぜクワガタアリグモだけ見つけることができないのか?…数年にわたる疑問であったが、「河川敷でスニーピングすると採れる」(初芝伸吾氏私信)という情報を頂いたので河川敷に探しにいった。探すまでもなかった。リュックを置いて小物を取り出していたら、いつの間にかリュックの上にあった。その近辺の草地で「たくさん」見つかった。河川敷のあまり丈の高くない草地の低位置に多く生息しているようである(2010.06.06 ほか)。

遠目にはクロヤマアリのワーカーに酷似し、その動き方も似ている。人の視線との位置的關係およびその距離にもよるがアリグモのようなカメラ視線はとらない。這いつくばって撮れば話は別だが…。集中力が低下してくるとクロヤマアリと識別できなくなる。老眼の進行が追い討ちをかける。動体視力も低下している。一人ではカウントできない。おそらく河川敷には「たくさん」いるクモなのだろう。個体数は決して少なくない割に見つけにくいクモである。(図 2-1: 左クワガタアリグモ♂; 右クロヤマアリ♀)
(図 2-2: 右2個体クワガタアリグモ♀) (図 2-3: 上から2・3個体目がクワガタアリグモ♂)

4. ヤガタアリグモ *Myrmarachne elongata* Szombathy 1915

河川敷に沿うように続く、とある工場の石垣を模した高さ 3 m ほどのコンクリート壁面では、長さ 3 m の範囲内に雌雄幼体含めて 36 個体が確認された場所がある（同定不可能だが生息状況から本種と思われる若～中齢幼体を含めると 50 個体超。

2010.07.07）。当河川敷では非常に個体数が多く、時期を問わず「行けば必ず見つかるクモ」である。「CD 日本のクモ ver.2010」の正式な記録では非常に個体数が少ないような印象を受けるが、インターネット上の画像情報から判断すると関東以南ではかなり分布域を広げているものと思われる。

大きさや色彩に変異が多く、体色の赤っぽい♀および幼体はタイリクアリグモ♀に、小型♂はヤサアリグモ♂亜成体？（脚注※1）に誤同定されている可能性が高い。♂においては相対成長（脚注※2）が見られるようであるが、この場所でも顎指数が 1 以上の♂は見つかっていない。いまのところ関東で見られるアリグモ属のうち顎指数が 1 を超えているのはヤサアリグモ♂だけのようなのである。「ヤガタアリグモはどのような色彩・形状を持ったクモなのか？」と聞かれても即答できない。既知の色彩変異だけではないかもしれない。ほかのアリグモ属をよく知っている方が「どこか違うような気がする」と感じたらヤガタアリグモを疑ってかかるべきかもしれない。（図 2-2：左 2 個体 ヤガタアリグモ♀）（図 2-3：最上段はタイリクアリグモ♂，下から 1・2 個体目はヤサアリグモ♂，下から 3 個体目がヤガタアリグモ矮小♂。ヤサアリグモおよびタイリクアリグモの赤色型は頭部も赤っぽいが、ヤガタアリグモは胸部が赤くとも頭部は黒い）（図 3：ヤガタアリグモ変異 1-3；♂，4；♂と♀，5；終齢近い幼体，6；中齢程度幼体，7-9；♀。画像はないが腹背前方がかなり赤みを帯びた♂もいる。）

※1：アリグモ属の♂亜成体は♀そっくりである。一般にクモの♂亜成体は触肢先端が膨らむため雌雄識別出来ることが多いが、アリグモ属では♀の触肢先端もやや扁平なので未熟雌雄を外見で識別するのは極めて困難である。♂成体の長い上顎は最終脱皮時に一気に伸張するのであり、脱皮の度に徐々に伸びる訳ではない。既知と思われるが念のため。

※2：各分野で用いられる概念だが、ここでは特に『体の大きな個体ほど、顎指数＝上顎長／胸部部長の値が大きくなる（池田 2010）』ことを指す。

5. ヒメクサグモ *Allagelena donggukensis* (Kim 1996)

河川敷近辺（新海・谷川 2006）や開放的な公園（馬場 2010），農地（馬場・吉武ほか 2010）など比較的乾燥した開けた環境に生息（新井浩司氏私信）しているようである。9月12日に2009年度談話会観察会の行われた横沢入に本種を探しに行ったが、まったく見つかることはできなかった。是政橋近辺の河川敷草地では「すごくたくさん」のヒメクサグモ見つかった。カウントするには1日がかかりになるほどである。本種の外見はコクサグモに似るが全体的に淡色である。また、腹部腹面の太い縦条がコクサグモではほぼ均一な暗褐色であるのに対し、ヒメクサグモでは同縦条の正中部が淡色となり2本の細い縦筋のように見える（谷川明男氏私信）。これにより幼体でも「ある程度」までは同定可能なようである（図 4-1；ヒメクサグモ♀腹面， 図 4-2；コクサグ

モ♀腹面)。造網位置は低く(馬場 2010), コクサグモが木本枝先付近に造網するのに対し, 本種は草本の茎を軸として造網することが多い。採集はランダムに行ったため確実とは言えないが, ヒメクサグモが「たくさんいる」木本のまったくない草地ではコクサグモは1匹も確認できなかった。河川敷内で1ヶ所だけ「丈が低い草地で数本のクワの木が生えている」という環境においては両種とも確認されたが, クワの木周辺の草本低部に造網していた *Allagelena* はすべてヒメクサグモ(6♀は生殖器確認済, さらにその周囲に10個以上あった網の主は未確認だがコクサグモの網との微妙な形状の違いや生殖器確認済ヒメクサグモ♀網との連続的とも言える造網状況により本種と判断)であった。同所におけるコクサグモはクワの木の通常よりかなり高い枝先(地上1~2.5 m)に3♀が造網していたのみで, パッチ的に両種が混生している状態は確認できなかった(2010.10.16)。分類を生業としない者にとって本種のような大きさのクモを多数液浸にし同定する作業はかなりの苦行である。今回の作業をもって「コクサグモとヒメクサグモの識別法は心得た」こととし, 今後採集はまったく行わないつもりでいた。しかし卵のう形状が未確認である。秋口に捕獲しておいた腹部の大きな2♀は「この手のクモは手がかからない。卵のうはすぐに作るだろう」と高をくくり「あまりにも手をかけなかった」ために2匹とも死なせてしまった。飼育環境不適當のストレスにより産卵しなかったのか, 何らかの栄養不足だったのかは判断しかねる。一度だけ生息場所で卵のうを捜してみたが, それらしきものは一つも見つけることができなかった。個体数の多さから考えるとクサグモと同様の形状であればまったく見つからないということはないだろう。卵のうや産卵場所もコクサグモに似ているのかもしれない。

6. ヤマトガケジグモ *Nurscia albofasciata* (Strand 1907)

線路の敷石や石垣の隙間などに普通に見られるクモである。河川敷個体も外見上の変異等は見られない(むろん通常個体差として腹背白斑の多寡はある)。しかし河川敷のヤマトガケジグモは網形状がユニークである個体が少なくない。隠れ家とする石下から草本の茎等を柱代わりとしてボロ網を垂直ネット状に張り出したもので, 高いものでは地上25 cmに達した(図1-3)。河川敷では石下から羽化および産卵しに来る飛翔昆虫が多いため, それらを主食としているものと思われる(2010.05.04ほか)。

7. カワラメキリグモ

Gnaphosa kamurai Ovtsharenko Platnick & Song 1992

河川敷石下などに複数個体確認。生殖器形状以外にメキリグモ *G. kompirensis* との相違を見出すことは出来ない。河原にいるからカワラメキリグモ, 森にいるからモリメキリグモ・・・と決め付けるのも乱暴だ。これらのパッチ的混生はないと思うが, 生息域を明確に線引きするのは難しい(2010.05.04ほか)。

8. イサゴコモリグモ *Pardosa isago* Tanaka 1977

形態は同属のキシベコモリグモ *P. yaginumai* によく似ており、生息地もほぼ同様であるが、和名にあるとおり砂地を好む傾向がある。安定した生息地はもう少し下流域（初芝伸吾氏私信）なのかもしれない。（2010.06.20 ほか）。

9. ヒロズケムリグモ *Zelotes potanini* Schenkel 1963

河川敷石下より 1♀採集（2010.06.06）。背甲形状や眼の位置に特徴があり（加村 2004）、慣れれば外見で識別可能なようである（図 4-4）。生息数多寡は調査不足のため不明。

10. ヒカリアシナグモ *Tetragnatha nitens* (Audouin 1826)

河川敷の歩道に生えたクワの木の低位置葉上にて 1♂採集（2010.09.19）。生息数多寡は調査不足のため不明。

11. コガネグモ *Argiope amoena* L. Koch 1878

東京都府中市におけるコガネグモ生息状況は、1990年代後半までに「ほぼ壊滅に近い状態」（萱嶋 1998）だったようだが、6月中旬に府中市側河川敷の野球練習場脇の草地で 4♀を確認することが出来た（図 4-3：♀、背景は是政橋。2010.06.20）。多摩川と並んで東京の代表的河川である荒川では、その中流域に本種が多産する場所がある（阿部汎孝氏私信）が、多摩川水系では極めて稀なクモである。TV番組「一発必中！ナゲナワグモ」で高名を馳せたあの横沢入にもコガネグモはいない（新井浩司氏私信）。近年多摩川水系で同所的に 4♀を確認した記録は他にないものと思われる。今後の推移を見守っていききたい。

12. カワラコゲチャハエトリ（仮称） *Sitticus* sp.

河川敷の乾燥した石の多い場所に生息する。国内に産するクモとして正式には認められていないようだが、「韓国のクモ図鑑（Namkung, J. 2001）に載っている *Sitticus albolineatus* (Kulczyński 1895) と同種と思われる。広島でも河川敷で時折見かける」（井原庸氏私信）、「河川敷で石起こしをするとよく見かける」（初芝伸吾氏私信）等々、かねてより認知されている方もおられるようである。

この河川敷では同属で本種より僅かに小さめのヒトリコゲチャハエトリ *S. avocator* も見られるが、*S. avocator* はコンクリートの橋脚、護岸、壁面などに多く見られ、大まかながら本種とは棲み分けしているようにも思われる。斑紋は本種よりはるかに小さいシラホシコゲチャハエトリ *S. penicillatus* と似たパターンを持つ。2010年6月20日に♀とともに卵のう採集、7月3日（もしくは前日）に出のう。出のう幼体で雌雄識別可能である（図 5-9）。出のう総数は 43 個体、正確性に欠けるので具体的数字は出

せないが性比に大差はない。

カワラコゲチャハエトリという名称は池田博明氏がヒトリコゲチャハエトリの和名が定着する以前に *S.avocator* に対して用意していたもののようだが、*S.avocator* が民家近くの壁面などでも見られるのに対し、本種は河川敷でしか確認されていないようなので、本種の和名として相応しいと思い提唱した。この件に関して何らかの情報・ご意見をお持ちの方がおられれば、談話会を通してご連絡願いたい。

(図 5 : 1 ; ♂成体, 2 ; ♂亜成体, 3 ; ♂左触肢, 4 ; ♀成体, 5 ; ♀亜成体, 6 ; ♀外雌器, 7 ; 生息環境, 8 ; 石下の住居, 9 ; 出のう幼体♂♀)

謝 辞

執筆に当たり多数の助言・知見を賜った阿部汎孝氏, 新井浩司氏, 池田博明氏, 井原庸氏, 谷川明男氏, 初芝伸吾氏に御礼申し上げる。

参考文献

- 新海明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生 2010. CD 日本のクモ ver.2010. 著者自刊 CD.
- 池田博明 2010. ハエトリグモの学名の解説 (2) アリグモ物語. *Kishidaia*, 98:21-32.
- 新海明・谷川明男 2006. 採集情報. 遊絲, 19 : 15-17.
- 馬場友希 2010. 千葉県松戸市「21世紀の森と広場」のクモ. *Kishidaia*, 97:59-67.
- 馬場友希・吉武啓・平箱俊太郎・楠本良延・栗原隆・吉松慎一 2010. 茨城県南部の農地で採集されたクモ標本目録. *Kishidaia*, 97:84-104.
- 加村隆英 2004. 日本産ワシグモ科の同定の手引き (インターネット版) .
- 萱嶋泉 1998. 府中市におけるコガネグモの 25 年間の生息推移について. 府中市郷土の森紀要 第 2 号抜刷:1-5.
- 小野展嗣 (編) 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会.
- Namkung, J. 2001. *The Spiders of Korea*. Kyo-Hak Publishing, Seoul, 591 pp.



图 1.



图 2.



图 3.



图 4.



图 5.

東京蜘蛛談話会 2010 年度飯豊山麓合宿報告
山形県小国町のクモ

池田 博明

2010年の7月17日(土)午後から7月19日(月)「海の日」午前まで、山形県西置賜(にしおきたま)郡小国町で東京蜘蛛談話会合宿を行った。本報文はそのときの記録である。山形県在住の吉田哉博士によると、この地域の蜘蛛は未調査とのこと。

参加者氏名は(五十音順), 浅間茂・安藤昭久・池田博明・泉宏子・伊藤博實・加藤むつみ・工藤泰恵・甲野涼・貞元己良・須黒達巳・田中一樹・田中誠・谷川明男・土屋昌利・中島亜紀・中島和之・中西亜耶・初芝秋沙・初芝伸吾・初芝琢磨・安田明雄・八幡明彦・八幡秋山沙和。(23名)



集合写真(昼食場所の飯豊山荘前にて)

同定は現地で行えるものは参加者によりその場で行い、記録した。生殖器による同定は『日本産クモ類』（2009年，東海大学出版）を参考に双眼実体顕微鏡を用いて行った。その他持ち帰った標本について情報を寄せて下さった浅間茂・安藤昭久・泉宏子・工藤泰恵・甲野涼・貞元己良・谷川明男・初芝伸吾・安田明雄の諸氏に感謝する。

日程および行動記録

2010年7月17日（土） 晴れ，一時にわか雨

前日までは梅雨で雨続き。関東地方でも局地的な集中豪雨があったが，米坂線の電車は遅れることもなく小国駅に到着。14:30に国民宿舎・梅花皮荘（かいらぎそう）の送迎バスに乗車，ほぼ30分で宿舎に到着した。なお，「かいらぎ」とは日本刀の柄に巻く皮のことだそうである。異説もあるが省略する。梅花皮荘の住所は小国町大字小玉川564-1。

自家用車で初芝一家・田中親子が到着。みんなが到着後，急に雷雨となる。本日は午前中は晴れていたが，昼ごろ遠雷が鳴っていた。夕方近くにととう土砂降り。しかし雨は一時間半程度で長続きはしなかった。

夕食は18:30。梅花皮荘の食事では，ほぼ毎食，岩魚（いわな）が出る。近くに「岩魚ランド」という養殖場があるのだ。そのほかに溪流釣りの人も多く訪れる。ただし，岩魚を釣るには，釣り券が必要である。宿舎の米は山形県産の「はえぬき」だった。

暗くなり始める20:00から宿舎周辺にて夜間観察を行う。大形の造網性種は少ない。夏のクモもまだ幼体だ。だいいち標高が300mと，さほど高くないのにジョロウグモがまったくいない。山形市の平地ではこの時期にはジョロウグモ幼体が体長10mmから15mmに育っているのにもかかわらず，である。小国町は豪雪地帯なのでその影響かもしれない，ふと思う。夜空は満天の星である。

21:30から宿舎312室でクモ合わせ及び同定。この部屋で休む安藤・貞元・谷川の諸氏には翌日の晩も遅くまで御迷惑をおかけしました。約50種を記録。0:15ごろ，自家用車で中西さん到着。

2010年7月18日（日） 晴れ，のち曇り

7:35朝食。自家用車の台数が少ないので，8:30に池田と同室の浅間・伊藤・土屋の諸氏には先に出発していただいた。飯豊連峰への登山口の飯豊山荘および温身平（ぬくみだいら）までは車で片道12分の距離である。登山客の車で飯豊山荘脇の駐車場はいっぱいだった。40台以上あった。

他の方々には9:00に池田・田中・初芝・中西の車に分乗して温身平まで移動した。温身平で早朝に町営バスで現地入りした安田さんと合流した。温身平は平成18年（2007年）4月に森林セラピーロードに指定されたブナの自然林である。樹種はブナ，ミズナラ，コナラ，ホオノキ，ヤチダモ，イタヤカエデ，低木にウワミズザクラ，タムシバ，

コブシ、クロモジ、ヤマブドウ、コクワ、クワ、エゾアジサイ、ヤマコウバシ、ウルシ、ツタウルシ、草本にウバミソウ（ミズ）、ミズタバコ、ツルアジサイ、ギンリョウソウ、オニノヤガラ、ツルアリドオシ等である。メインロードは仕事車だけが通行可能な道路で1 km 余り歩くと飯豊連峰が展望できる「十字路」に着く。そこから「けもの歩道」を戻る一周2 km が一般的なセラピーコース。途中で樹齢200年と推定されるヤチダモの巨木がある。けもの歩道には樹齢300年のミズナラがあったが、甲虫カシナガシクイによる「ナラ枯れ」の被害で枯れてしまった。この山形県置賜地方では4～5年前からミズナラやコナラの老木でナラ枯れ被害が目立ち始め、今年は昨年より虫の活動開始がやや遅いものの若木にも被害が及ぶようになってきているという（現地案内人ボランティア三須さんの話）。夏の山は緑で被われるのが普通の景観だが、小国の山のあちらこちらに茶色に枯れたナラ枯れが目立つ。薬剤注入・フェロモン処理などの対策は効果の低さと資金難で、被害の拡大に追いついていない。ちなみにナラ枯れ被害は東北日本を北上中である。

昼食を飯豊山荘で取った。冷水がおいしい。クモ合わせをした後で、午後、一部はけもの歩道中心にクモを探索、田中・初芝・中西車は玉川中里まで下って15:30まで採集。加藤さんは町営バスを利用して飯豊山荘から帰宅。けもの歩道で浅間さんはテンを目撃したと云う。

夕食は宿舎で18:30から。岩魚は味噌漬けの焼き物だった。ちなみに私は岩魚のこの食べ方は初めてだった。昨日の岩魚料理は塩焼きだった。池田が事前調査で入った日16日の夕食に出た丸揚げが頭から尾まで食べられたのだが、それがこの両日出なかったのがやや残念である。

20:00 夜間調査は温身平にて行った。昼間には造網していなかったイシサワオニグモ幼体の網がたくさんあり、目立った。懐中電灯を持たない登山客が2名、温身平の森からヤブをこいで降りて来たのに出会って仰天した。

22:00 から、312室でクモ合わせ及び同定。

2010年7月19日（月） 晴れ

7:35から朝食。9:00宿舎の送迎バスにて3年前に廃校になった小玉川小中学校に移動した。その周辺で11:20まで調査を行う。校舎外壁ではイワツバメが子育て中だった。観察の合間に近くにある「マタギの館」を見学する人もいた。マタギの館は、6年前から開館しているというが、新聞記事によれば本館が出来たのは3年前の5月。1階は軽食堂と土産物売り場、2階が小規模な展示室になっている。開館時刻は10:00だそうだが、早く開館していただいた。無人の小玉川小中学校の管理もしているという館長によると、この小玉川集落のマタギの数は16人、そのうち若者3名は最近修了証を受けたものだという。戸数当たりのマタギ人数としては結構多い方であるようだ。館内のビデオ（山形放送YBC製作）によると、マタギの最も主要な獲物はウサギだった。

昔はクマやニホンカモシカも撃っていた。マタギの館周辺で安田さんがジョロウグモの幼体を発見。今回の合宿では初めて出会った。

11:39 小玉川小中学校前バス停で解散し、電車で帰宅するみなさんは、町営バスに乗車して小国駅に移動。駅前で昼食後、休憩して 14:11 小国駅発、13:56 米沢駅着の電車で帰宅の途につく。

池田は自家用車で小国駅に向かう途中、12:10 ごろ玉川新田の山側から斜面を駆け下りてきた白い動物が視界の隅に入った。急ブレーキを踏む。車の直前を横断した身の丈 1.2 m くらいの動物に危うく衝突しそうになった。この動物は、なんとカモシカだった。カモシカは車の方に顔を向けることもなくアッという間に谷側へ駆け下りて行った。

小国町 クモ目録

以下、和名と学名は谷川 (2010) による。採集地点の経度；緯度；標高は梅花皮（かいらぎ）荘 139°40' E；37°57' N；300 m，温身平 139°41' E；37°56' N；510 m，玉川中里 139°40' E；37°59' N；250 m，小玉川小中学校前 139°40' E；37°58' N；271m。経度・緯度は地形図から読みとり，標高は Google Earth を参考にその地域周辺の値である。

発育段階表示は E=卵のう，F=メス成体，f=メス亜成体，M=オス成体，m=オス亜成体，n=幼体，y=出のう幼体。和名の後の (*) 印は，新海ら (2010) に未収録の山形県新記録種である。

1. 確定種 148 種 幼体でも類似種がない場合は確定した。

ジグモ科

ジグモ	<i>Atypus karschi</i>	MF
かいらぎ荘		

ユウレイグモ科

イエユウレイグモ	<i>Pholcus phalangoides</i>	M
かいらぎ荘，温身平，学校前		

シモングモ	<i>Spermophora senoculata</i>	MF
学校前		

センショウグモ科

センショウグモ	<i>Ero japonica</i>	M
かいらぎ荘		

チリグモ科

ヒラタグモ	<i>Uroctea compactilis</i>	F
小国駅		

ウズグモ科

カタハリウズグモ *Octonoba sybotides* Fey

かいらぎ荘, 温身平

ウズグモ *Octonoba varians* F

かいらぎ荘, 温身平, 学校前

エゾウズグモ *Octonba yesoensis* F

かいらぎ荘, 温身平, 学校前

ホラヒメグモ科

コホラヒメグモ *Nesticella brevipes* MF

温身平, 玉川中里, 学校前

ヒメグモ科

オナガグモ *Ariamnes cylindrogaster* FE

玉川中里

ギボシヒメグモ *Chikunia albipes* MFEmny

かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里, 学校前, 稲荷神社

ホシミドリヒメグモ *Chryso foliate* FE

温身平, 学校前

ヤマトコノハグモ *Enoplognatha aricis* F

玉川中里

カレハヒメグモ *Enoplognatha abrupta* Fn

学校前, 稲荷神社

シモフリヒシガタグモ *Episinus kitazawai* F

温身平

ムラクモヒシガタグモ *Episinus nubilus* F

玉川中里

ツリガネヒメグモ *Parasteatoda anglitholax* MF

かいらぎ荘, 温身平, 学校前

カグヤヒメグモ *Parasteatoda culicivora* MFn

かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里

コンピラヒメグモ *Parasteatoda kompirensis* M

温身平, 玉川中里

キヨヒメグモ *Parasteatoda oculiprominensis* M

かいらぎ荘

ハモンヒメグモ *Parasteatoda simulans* MFf

かいらぎ荘, 学校前

オオツリガネヒメグモ *Parasteatoda tabulate* F

温身平

オオヒメグモ	<i>Parasteatoda tepidariorum</i>	FEn
かいらぎ荘, 温身平, 稲荷神社		
ツクネグモ	<i>Phoroncidia piluta</i>	F
かいらぎ荘		
カニミジグモ	<i>Phycosoma mustelinum</i>	MF
かいらぎ荘, 温身平, 学校前, 玉川中里		
ヤリグモ	<i>Rhomphaena sagana</i>	MmFn
かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里		
オガタモリヒメグモ	<i>Robertus ogatai</i>	F
学校前		
タカネヒメグモ	<i>Rugathodes nigrolimbatus</i>	F
温身平, 玉川中里, 学校前		
スネグロオチバヒメグモ	<i>Stemmops nipponicus</i>	F
温身平		
タカユヒメグモ	<i>Takayus takayensis</i>	MFE
温身平		
ムネグロヒメグモ	<i>Theridion pinastri</i>	MFEy
かいらぎ荘, 学校前, 玉川中里		
ボカシミジグモ	<i>Yaginumena castrata</i>	MFfn
かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里, 学校前, 稲荷神社		
シモフリヒメグモ	<i>Yunohamella lyrica</i>	F
温身平		
コケヒメグモ	<i>Yunohamella subadulta</i>	Fn
温身平		
ユノハマヒメグモ	<i>Yunohamella yunohamensis</i>	F
かいらぎ荘		
カラカラグモ科		
ヤマジグモ	<i>Ogulnius pullus</i>	F
温身平		
カラカラグモ	<i>Theridiosoma epeiroides</i>	MFEEn
かいらぎ荘, 温身平, 学校前		
ナルコグモ(*)	<i>Wendilgarda nipponica</i>	M
温身平		
ユアギグモ科		
ユアギグモ(*)	<i>Patu kishidai</i>	F
学校前		

ヨリメグモ科			
ヨリメグモ	<i>Conculus lyugadinus</i>	F	
学校前			
サラグモ科			
ザラアカムネグモ(*)	<i>Asperthorax communis</i>	F	
温身平			
ニホンウスイロサラグモ(*)	<i>Asthenargus niphonius</i>	F	
温身平			
ノコギリヒザグモ	<i>Erigone prominens</i>	F	
かいらぎ荘			
キヌキリグモ	<i>Herbiphantes cericeus</i>	mn	
温身平			
タテヤマテナガグモ(*)	<i>Microbathyphantes tateyamensis</i>	MF	
温身平			
クボミケシグモ	<i>Lepthyphantes concavus</i>	F	
玉川中里			
ヤガスリサラグモ	<i>Nereine albplimbata</i>	F	
玉川中里			
ハンモックサラグモ	<i>Nereine angulifera</i>	F	
温身平			
アシナガサラグモ	<i>Neriere longipedella</i>	MFn	
かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里, 学校前			
ヘリジロサラグモ	<i>Nereine oidedicata</i>	n	
温身平, 玉川中里, 学校前			
ミヤマナンキングモ(*)	<i>Neserigone basarkini</i>	F	
温身平, 玉川中里, 学校前			
シミズサラグモ	<i>Oreonetides shimizui</i>	F	
温身平			
シタガタサヤサラグモ(*)	<i>Oreonetides vaginatus</i>	F	
温身平, 学校前			
オオイワヤマトコナグモ(*)	<i>Paratapinocyba oiwa</i>	F	
温身平			
ヨツボシサラグモ	<i>Strandella quadrimaculata</i>	F	
温身平, 玉川中里			
ヌカグモ	<i>Tmeticus bipunctis</i>	F	
学校前			
ユノハマサラグモ	<i>Turinyphia yunohamensis</i>	F	

温身平			
オオサカアカムネグモ	<i>Ummeliata osakaensis</i>		MF
かいらぎ荘			
アシナガグモ科			
オオシロカネグモ	<i>Leucauge celebesiana</i>		MF
かいらぎ荘, 玉川中里			
コシロカネグモ	<i>Leucauge subblanda</i>		MF
かいらぎ荘, 学校前, 玉川中里			
キララシロカネグモ	<i>Leucauge subgemmea</i>		MFfn
かいらぎ荘, 玉川中里, 学校前			
キンヨウグモ	<i>Menosira ornate</i>		n
かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里, 学校前			
サンロウドヨウグモ	<i>Meta japonica</i>		n
学校前			
ヤマジドヨウグモ	<i>Meta reticuloides</i>		n
温身平, 学校前			
メガネドヨウグモ	<i>Metleucauge yunohamensis</i>		F
かいらぎ荘, 学校前			
タニマノドヨウグモ	<i>Metleucauge kompirensis</i>		F
かいらぎ荘, 玉川中里			
チクニドヨウグモ	<i>Metleucauge chikunii</i>		F
学校前			
ハラビロアシナガグモ	<i>Tetragnatha extensa</i>		Fn
玉川中里, 学校前			
ヤサガタアシナガグモ	<i>Tetragnatha maxillosa</i>		F
学校前			
アシナガグモ	<i>Tetragnatha praedonia</i>		MFn
かいらぎ荘, 玉川中里, 学校前			
エゾアシナガグモ	<i>Tetragnatha yesoensis</i>		MFn
かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里			
ジョロウグモ科			
ジョロウグモ	<i>Nephila clavata</i>		n
マタギの館周辺, 稲荷神社			
コガネグモ科			
ハツリグモ	<i>Acusilas coccineus</i>		F
かいらぎ荘			

ヤミイロオニグモ かいらぎ荘	<i>Alenatea fuscocolorata</i>	F
ナガコガネグモ 学校前	<i>Argiope bruennichi</i>	m
オオクマヤミイロオニグモ(*) かいらぎ荘	<i>Araneus acusisetus</i>	F
ヌサオニグモ かいらぎ荘, 温身平	<i>Araneus ejasmodi</i>	MFn
イシサワオニグモ かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里	<i>Araneus ishisawai</i>	n
ビジョオニグモ かいらぎ荘	<i>Araneus mitificus</i>	n
アオオニグモ 学校前	<i>Araneus pentagrammicus</i>	n
ヤマオニグモ かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里	<i>Araneus uyemurai</i>	MFn
オニグモ かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里, 稲荷神社	<i>Araneus ventricosus</i>	MFn
ムツボシオニグモ かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里, 学校前	<i>Araniella yaginumai</i>	MFEn
ギンメッキゴミグモ 温身平	<i>Cyclosa argenteoalba</i>	n
クマダギンナガゴミグモ かいらぎ荘	<i>Cyclosa kumadai</i>	F
キジロゴミグモ かいらぎ荘	<i>Cyclosa laticauda</i>	FE
ヨツデゴミグモ 温身平	<i>Cyclosa sedeculatta</i>	F
トリノフンダマシ(*) 学校前	<i>Cyrtarachne bufo</i>	n
カラフトオニグモ 温身平	<i>Eriophora sachalinensis</i>	F
トゲグモ 温身平	<i>Gasteracantha kuhli</i>	n
キザハシオニグモ 学校前	<i>Gibbaranea abscissa</i>	n
ドヨウオニグモ	<i>Neoscona adianta</i>	n

学校前		
ワキグロサツマノミダマシ(*)	<i>Neoscona melloteei</i>	n
かいらぎ荘, 玉川中里		
イエオニグモ	<i>Neoscona nautical</i>	Ff
かいらぎ荘, 学校前		
ヤマシロオニグモ	<i>Neoscona scylla</i>	MFn
かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里		
ズグロオニグモ	<i>Yaginumia sia</i>	MFn
かいらぎ荘		
コモリグモ科		
ハタチコモリグモ(*)	<i>Alopecosa moriutii</i>	F
学校前		
カワベコモリグモ(*)	<i>Arctosa kawabe</i>	F
温身平		
ウツキコモリグモ	<i>Pardosa astrigera</i>	mF
かいらぎ荘		
ヤマハリゲコモリグモ	<i>Pardosa brevivulva</i>	F
温身平, 玉川中里		
キシベコモリグモ	<i>Pardosa yaginumai</i>	MF
温身平		
クラークコモリグモ	<i>Pirata clercki</i>	F
温身平, 玉川中里		
チビコモリグモ	<i>Pirata procurvus</i>	F
玉川中里		
コガタコモリグモ(*)	<i>Pirata tanakai</i>	MFey
玉川中里		
サシアシグモ科		
シノビグモ(*)	<i>Sinobius orientalis</i>	n
温身平		
キンダグモ科		
スジアカハシリグモ	<i>Doromedes silvicola</i>	FEn
温身平, 玉川中里, 学校前		
アオグロハシリグモ	<i>Dolomedes raptor</i>	n
温身平, 学校前		
イオウイロハシリグモ	<i>Dolomedes sulfreus</i>	n
温身平		

タナグモ科		
イナズマクサグモ	<i>Agelena labyrinthica</i>	Mfn
温身平		
クサグモ	<i>Agelena silvatica</i>	fmn
温身平, 学校前		
コクサグモ	<i>Allagelena opulenta</i>	n
温身平, 学校前		
ハタケグモ科		
ハタケグモ(*)	<i>Hahnica corticola</i>	F
かいらぎ荘		
ツチフクログモ科		
カバキコマチグモ	<i>Cheiracanthium japonicum</i>	MFn
かいらぎ荘, 温身平, 学校前		
ヤサコマチグモ	<i>Cheiracanthium unicum</i>	F
かいらぎ荘		
イツツグモ科		
ナガイズツグモ	<i>Anyphaena ayshides</i>	F
温身平		
イツツグモ	<i>Anyphaena pugil</i>	F
玉川中里		
フクログモ科		
ミチノクフクログモ(*)	<i>Clubiona diversa</i>	M
玉川中里		
ヤマトフクログモ	<i>Clubiona japonica</i>	F
かいらぎ荘, 学校前		
ヤハズフクログモ	<i>Clubiona jucunda</i>	F
学校前		
ヒメフクログモ	<i>Clubiona kurilensis</i>	Mf
かいらぎ荘, 玉川中里		
ウエノフクログモ(*)	<i>Clubiona uenoi</i>	MF
かいらぎ荘, 学校前		
ムナアカフクログモ	<i>Clubiona vigil</i>	MFf
温身平, 学校前		
ネコグモ科		
イナズマウラシマグモ	<i>Phrurolithus claripes</i>	F
温身平		
ヤバネウラシマグモ	<i>Phrurolithus pennatus</i>	n

学校前		
ワシグモ科		
メキリグモ	<i>Gnaphosa kompirensis</i>	F
かいらぎ荘		
ヨツボシワシグモ	<i>Kishidaia albimaculata</i>	F
温身平		
アシダカグモ科		
コアシダカグモ	<i>Sinopoda forcipata</i>	Mf
温身平		
エビグモ科		
ヤドカリグモ	<i>Thanatus miniaceus</i>	F
かいらぎ荘		
キンイロエビグモ	<i>Philodromus auricomus</i>	F
かいらぎ荘		
アサヒエビグモ	<i>Philodromus subaureolus</i>	F
玉川中里		
スジシャコグモ	<i>Tibellus oblongus</i>	M
かいらぎ荘		
カニグモ科		
コハナグモ	<i>Diaea subdola</i>	FE
かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里		
ワカバグモ	<i>Oxytate striatipes</i>	Fn
かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里		
セマルトラフカニグモ	<i>Tmars rimosus</i>	MF
温身平		
アズチグモ(*)	<i>Thomisus labefactus</i>	n
かいらぎ荘		
チシマカニグモ(*)	<i>Xysticus kurilensis</i>	MF
玉川中里, 学校前		
ハエトリグモ科		
ヤマジハエトリ	<i>Asianellus festivus</i>	n
かいらぎ荘		
マミジロハエトリ	<i>Evarcha albaria</i>	M
かいらぎ荘		
ウスリーハエトリ	<i>Heliophanus ussuricus</i>	Fn
玉川中里		

オオハエトリ かいらぎ荘, 稲荷神社	<i>Marpissa milleri</i>	Mf
ネオンハエトリ(*) 学校前	<i>Neon reticulatus</i>	F
マガネアサヒハエトリ かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里, 学校前	<i>Phintella arecicolor</i>	MFf
アサヒハエトリ(*) 温身平	<i>Phintella parva</i>	F
デーニツツハエトリ かいらぎ荘, 温身平, 学校前	<i>Plexippoides doenitzi</i>	Fn
ヒメカラスハエトリ 学校前	<i>Rhene albigera</i>	F
キレワハエトリ 稲荷神社	<i>Sibianor pullus</i>	M
ウススジハエトリ かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里	<i>Yaginumaella striatipes</i>	MF

2. 未確定種 19種

ピモサラグモ科

アシヨレグモの一種 かいらぎ荘, 温身平	<i>Weintrauboa</i> sp.	n
-------------------------	------------------------	---

サラグモ科

ホラスカグモの一種 温身平	<i>Caviphantes</i> sp.	M
ナンキングモの一種 玉川中里	<i>Hylyphantes</i> sp.	F
ヤセサラグモの一種 温身平	<i>Lepthyphantes</i> sp.	n
フタスジサラグモ かいらぎ荘, 学校前	<i>Nereine limbatinella</i>	n
ケシグモの一種 温身平, 学校前	<i>Nippononeta</i> sp.	MF
ゴマグモの一種 温身平, 学校前	<i>Pseudomicargus</i> sp.	F
アリマネグモの一種 かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里	<i>Solenysa</i> sp.	MF

コガネグモ科

カラオニグモ 学校前	<i>Araneus tsurusakii</i>	n
コモリグモ科 コモリグモの一種 温身平	<i>Pirata</i> sp.	FEn
ナミハグモ科 ナミハグモの一種 温身平, 学校前	<i>Cybaeus</i> sp.	Mm
ハタケグモ科 ヤマハタケグモ(*) 学校前	<i>Neoantistea quelpartensis</i>	n
ツチフクログモ科 コマチグモの一種 かいらぎ荘	<i>Cheiracanthium</i> sp.	M
ガケジグモ科 セスジガケジグモ かいらぎ荘, 温身平	<i>Taira flavidorsalis</i>	n
ヤマヤチグモの一種 かいらぎ荘, 温身平, 玉川中里	<i>Coelotes</i> sp.	Fn
フクログモ科 フクログモの一種 温身平	<i>Clubiona</i> sp.	MF
ワシグモ科 メキリグモの一種 かいらぎ荘	<i>Gnaphosa</i> sp.	F
ワシグモの一種 温身平	F	
カニグモ科 アマギエビスグモ かいらぎ荘	<i>Lysiteles coronatus</i>	n

生態情報 (順不同)

- (1) 温身平や宿舍周辺ではジョロウグモを見かけなかった。ヒメグモ（ニホンヒメグモ）も見かけなかった。
- (2) マガネアサヒハエトリは要注意種である。個体変異が多いと指摘されているが、ワカバネコハエトリと酷似しており、違いが識別できないのだ。この属を集中

的に研究している研究者がいるのでその結果が待たれるところである。各自標本を大切に保管しておいていただきたい。

- (3) ホシミドリヒメグモは1個の卵のうをガードしていた。関東地方では5月ころ産卵する春のクモであるが、本地方では時期が遅い。
- (4) 玉川中里や学校周辺では、通常は高標高に分布が限られるタカネヒメグモが採集された。
- (5) 学校の外壁の窓枠下に造網していたムネグロヒメグモは出のうした1個の卵のうの傍でまどい中の子グモをガードしていた。子グモは48頭。
- (6) 山形県初記録種は、ナルコグモ、ユアギグモ、ザラアカムネグモ、ニホンウスイロサラグモ、タテヤマテナガグモ、ミヤマナンキングモ、シタガタサヤサラグモ、オオイワヤマトコナグモ、オオクマヤミイロオニグモ、ハタチコモリグモ、カワベコモリグモ、コガタコモリグモ、シノビグモ、ハタケグモ、ミチノクフクログモ、アズチグモ、チシマカニグモ、ネオンハエトリ、アサヒハエトリの19種。ヤミイロオニグモはオオクマヤミイロオニグモと混同されていた時の過去の記録はあったが、今回改めてオオクマヤミイロオニグモ（谷川同定）と共に確認された（初芝同定）。幼体ではあるがトリノフンダマシ、ワキグロサツマノミダマシ、ヤマハタケグモも可能性があった。

参考文献

- 谷川明男 2010. 日本産クモ類目録 ver.2010R2. Kishidaia, 98: 59-129.
新海 明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生 2010. CD 日本のクモ ver.2010.

K I S H I D A I A 投稿規定

- 1) 投稿資格は本会会員とする。ただし共著者には、会員以外の者を含むことができる。依頼原稿については、本会会員でなくとも、運営委員会の承認があればよい。
- 2) 投稿内容は、クモや東京蜘蛛談話会に関しての論文、解説、記録、紀行文、感想などとする。
- 3) 原稿の採否については、運営委員会にて決定する。また、原稿に対して加筆・削除・訂正などをお願いすることがある。
- 4) 頁数は図表を含めて、刷り上がり 8 頁以内とし、超過頁分は著者負担となる。ただし超過頁分の代金を徴収しない場合があり、別項に記す。超過頁代は 1 頁につき 2500 円とするが、印刷費の変更等により、金額が変わることがある。
- 5) 特別な費用を要する印刷は、その実費を著者負担とする。
- 6) 別刷りは 50 部単位で作成するが、その費用は全額著者負担とする。
- 7) 論文の著者校正は 1 回だけとする。DRAGLINES など短文の場合は著者校正を省略する場合がある。

超過頁分を徴収しない場合

- 補 1) 談話会活動報告（観察会報告・合宿報告など）は超過頁代を取らない。
- 補 2) 各県別目録を積極的に掲載する方針が 1997 年 4 月の総会で確認され、主旨に沿う原稿に関しては超過頁代を取らずに掲載する。
- 補 3) その他運営委員会で認めたもの。

原稿作成上の注意

- 1) 手書き原稿は白紙に黒字、横書きで書いて下さい。
- 2) 文章は 5 行目から書き始め、1 行目にタイトルを、3 行目に著者名を書いて下さい。
- 3) ワープロなどで原稿を作成した場合は、プリントアウトしたものではなく FD あるいは CD をお送りください。
- 4) 図は製図用インクなどにて完成したものにして下さい。図、写真などを画像ファイルとしてお送りくださる場合には、本文中に貼り付けたものだけではなく、元の画像ファイルそのものもお送りください。画像解像度は刷り上りのサイズで 300dpi 以上でないときれいに印刷できません。デジタルカメラで撮影した写真は解像度などを変更せずにもとのままのファイルでお送りください。
- 5) 原稿は電子メールでも受付けます。ただし添付ファイルが開けない事も予想されますのでテキストファイルで送って下さい。なお、原稿ファイルでは、中央ぞろえや字下げなどの書式の設定は一切行わないでください。

東京蜘蛛談話会

運営委員

池田 博明・小野 展嗣・木村 知之・甲野 涼・新海 明・谷川 明男・仲條 竜太・萩
本 房枝・初芝 伸吾・安田 明雄・八幡 明彦

会 長：新海 栄一 185-0011 東京都国分寺市本多 1-6-6

本 部：小野 展嗣 169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1
国立科学博物館動物研究部

会誌編集：仲條 竜太 194-0041 東京都町田市玉川学園 7-7-10-103
E-mail: r_nakajo@jcom.home.ne.jp

(原稿送付先) 池田 博明 258-0018 神奈川県足柄上郡大井町金手 1099
E-mail: fwg9084@mb.infoweb.ne.jp

通信編集：谷川 明男 247-0007 神奈川県横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416
E-mail: dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

事 務 局：初芝 伸吾 186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203 (有) エコシス
E-mail: hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

会 計：安田 明雄 231-0861 神奈川県横浜市中区元町 5-219
E-mail: kobato@gol.com

郵便振替：00170-8-74885 東京蜘蛛談話会 (年会費：一般 3800 円／学生 2000 円)

会計監査：梅林 力・加藤輝代子

KISHIDAIA No.99 2011 年 5 月 31 日 印刷 編集者 仲條 竜太

2011 年 5 月 31 日 発行 発行者 新海 栄一

発行所 東京蜘蛛談話会

東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館動物研究部 小野 展嗣 方

印刷 株式会社オーエム 大阪市東成区中道 4-5-14-101

K I S H I D A I A

Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No.99, May 2011

— 目 次 —

西野 真由子：イエユウレイグモの産卵期	1
藤野 知弘・池田 博明：座間市のクモ調査ノート (2) 神奈川県立座間谷戸山公園のカネコトタテグモ	6
山本 一幸：アカイロトリノフンダマシの交接	9
中島 はる：蜘蛛と音楽 第一章・第二章 (全四章)	11
新海 明：天草の「謎」ーキムラグモの空白地	20
新海 明：キムラグモを求めて ～佐多岬は遠かった	23

DRAG L I N E S

水山 栄子：ワクドツキジグモを横浜市内で発見	27
萩野 康則：千葉県野田市の温室内で採集されたクロガケジグモ	27
中島 晴子：東京都目黒区のマルゴミグモ	28
笹岡 文雄：シロカネイソウロウグモが網に侵入したクモ類について	29
馬場 友希・栗原 隆：北海道北見市常呂町で採集されたクモ	29
馬場友希・松村雄：マレーズトラップによる石垣島のクモ	30
笹岡 文雄：伊豆諸島・神津島のクモ類	32
笹岡 文雄：伊豆諸島・三宅島における地中性クモ類及びその他のクモ	38
荘司 康治郎：多摩川是政橋近辺のクモ	45
池田 博明：東京蜘蛛談話会 2010 年度飯豊山麓合宿報告 山形県小国町のクモ	54